
零崎行識の人間旅行

プラネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎行識の人間旅行

【NZコード】

N1874S

【作者名】

プラネット

【あらすじ】

殺し名序列第三位『零崎一賊』。二十年後の一賊の若き長、零崎行識は一賊の完全壊滅を田論む者達との戦いに巻き込まれる。歴史改變を、そして一賊存亡を賭けた物語が幕を開ける。

登場人物紹介（前書き）

本編登場キャラのネタバレも含みますが、それでも見たい方はどうぞ。

登場人物紹介

（登場人物紹介）（最新話現在）

零崎行識（ぜろざき・こうしき） 未来人。

未来人。

零崎高織（ぜろざき・たかおり） 未来人。

未来人。

零崎人識（ぜろざき・ひとしき） 殺人鬼。

殺人鬼。

無桐伊織（むとう・いおり） 殺人鬼。

殺人鬼。

空時元雨（そらじ・げんう） 正体不明。

正体不明。

空時花濃（そらじ・かの） 正体不明。

正体不明。

闇口靈衣（やみぐち・れいい） 暗殺者。

暗殺者。

罪口積雪（つみぐち・つみゆき） 武器職人。

絵本園樹（えもと・そのき） ドクター。

ドクター。

石丸小唄（いしまる・こうた） 大泥棒。

大泥棒。

六何我樹丸（りつか・がじゅまる） 生涯無敗。

生涯無敗。

闇口憑依（やみぐち・ひょうい） 暗殺者。

暗殺者。

哀川潤（あいかわ・じゅん） 人類最強。

人類最強。

西東天（さいとう・たかし） 人類最悪。

人類最悪。

登場人物紹介の人物は隨時更新します。

序章（前書き）

作者初の零崎小説です。
細々とゆっくり更新していく予定なので応援よろしくお願いします。

それはとあるどこの街だった。

前触れなど何一つ微塵に起こす事も無く　　彼らは対面した。
正々堂々と。正面と。堂々と。公明正大に。逃げも隠れもせず
彼らは向き合つ。

片方は顔面に刺青のある男、方やもつ片方は童顔といふにも
変わった対面を彼らは果たしていた。

やがて刺青の男が口を開く。

「かはは。……お前、何者だよ？」
「……」

童顔の人物は答えない。ただ、微笑んでいるだけだ。
その余裕が刺青の人物からすればどこか嫌なのだ。

「殺し名だよな？」

「ええ、殺し名です」

童顔の人物は隠すこともしなければ、一切否定などもせずに首を
うん、と縦に頷かせた。

「俺を殺しに来たんだろ？　だつたらかかつて来な。殺して解して
並べて揃えて晒してやんよ」

「お言葉は有り難いですが　　遠慮しておきます、零崎人識さん」

「変わりすぎだろ」

「はい、僕はとっても変わっています」

人識 そう呼ばれた刺青の男は戦う姿勢を解いた。理由は聞かなくても分かる。童顔の人物には自分を殺すつもりが一切無いのだという事が理解できるのである。

そして、童顔の人物は続けてこう言った。

「では僕も自己紹介を。僕の名前は零崎行識。^{ゼニサキヒヨウチキ} 人識さん、あなたと同じ 零崎ですよ」

人識は行識の発言が信じられなかつた。

零崎 殺し名序列第三位、殺人鬼集団『零崎一賊』。

それが零崎なのであるが、それ以上に重要なのは今現在、零崎一賊が全滅しているという事だ。

ほんの少し前 人識は大厄島に行つた。それ以前に彼はある人物と共に人類最強を倒しに向かつた のではあつたが。それ以上のことは正直思い出したくない。

あれは屈辱そのものだ。いや、屈辱と呼んでいいものなのだろうか。

とにかく、零崎一賊を全滅させた張本人は橙色の髪を持つ 橙なる種、想影真心。^{おもかけまこと} 真心の手により、零崎一賊は全滅。人識は今は珍しい零崎の生き残りだ。

いや、零崎はまだもう1人いる。それは無桐伊織という人物だ。またの名を零崎舞織。^{ゼニサキマツヅチ}

今や零崎一賊は人識と伊織の二人だけ。だというのにも関わらず、目の前にいる人物は零崎性を名乗つていいのだ。

行識と名乗つた人物は人識より若干背丈が高かつた。髪の毛はボ

サボサの茶髪。黒のタートルネックを巻いた上で更に学ランを開いた上で着用なさっている。その下には灰色のトレーナー。そしてダボダボの黒ズボン。靴はどこにでもありそうなスニーカーだった。しかし、この人物は 終始笑顔を絶やさない。それが人識にとつてはある意味で不気味に感じるところだ。

人識は 口を開いた。閉じきつた重い口を開く。

「零崎一賊か？」

「はい」

「……一賊の生き残りなのか？ いや、一賊は俺と伊織ちゃんを残して全滅したはずだし……」

その時だった。

『行識。お前さんがもたもたしておひつから、人識が困つてしまつてゐではないか』

「ちょ、零！ 何勝手に出てきてるのさ……！」

「……へ？」

人識の目の前に突如として現れたモノを一言で言つならば それは幽靈だ。

幽靈はいかにも武士の姿をしていた。青の袴を身に着け、どこにでもいそうな侍のような姿をしている。ただ、見た目はかなり老いている。お年寄りなのだろう。しかし

ますますワケが分からなくなってきた。幽靈と喋る、なんて事をする零崎は聞いた事が何一つとしてない。第一、そんなプレイヤーがいたら別の意味で名が知れ渡る事は確実なはずだ。

「零、勝手に出てくるなってあれ程言つたじやないか」

『知らんな、お前さんがもたもたしてあるのが悪い。第一、見てみ

い。人識も理解不能な顔をしておる』

「それは間違いなく零、君のせいだよ……」

『何？ ワシの責任とでも言つのか？ お前さん、いつからそこまで

で付け上がりおつた』

「付け上がりつてないつて！ 零の勘違い振りはホント、酷いよ……」

『まあいい機会じや。ほれ、とつとと言つてしまえ行識』

『……まあいつか。で、では改めて零崎人識さん』

「何だよ』

「僕が何者なのか お話しましょつ』

続くよろこ行識はとんでもない事を口にする。それこそ、物理的には有り得ないような事を、彼は口にするのだ。

「僕は未来から来ました。今より一十年後の世界から

「……は？」

「僕は一十年後に存在する零崎一賊 そして同時に一賊の長です」

「つ、つまつ……要するにお前、時を越えて来たつてわけか？」

「その通りです」

「信じられねえ……」

『お前さん、しかし有り得ないとは言つ切れんぞ。ドラえもんとて二十一世紀から来ておる。ワシ達が未来から来なことこの保証はどこにあるまいよ』

「あれは百年先だから信じられるんだよ！ ていうか一十年後でタイムマシンが出来るか！』

と、人識は反論こそしたもの、現実を見る限り、彼らがタイムマシンのような物やそれに近い物を使つてゐることは明白である。

「まあ、そんな事はどうでもいいんです

「どうでもいい？」

「これをどうぞ」

その言葉と共に行識が人識に投げ渡したモノ　それは一つのナイフ。

ナイフの扱いに長ける人識がキヤツチでミスをするはずがなく、人識はそれをしつかりと掴んだ。

「傑作だぜ。お前、殺るうつてのか？」

「ええ、構いません。でも、勝負は戦闘不能まで。不殺で宜しいですか？」

「……構わねえ。『最強』との約束もある事だしな」

刹那、空気が一変した。

人識は同時に理解する事となる。コイツもやはり、本物のプレイヤーであり

そして。

彼が『零崎』だという事も。殺氣で分かる。衝動を感じ取れるから分かる。

そして、彼は　行識は名乗る。

プロフェーク

「僕の名は超越者、零崎行識。あなたの未来を破壊する」

「カハハ、傑作だぜ！　かかつて来いよ未来の零崎　殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

「画して　未来から来た、と名乗る零崎」と零崎行識と零崎の鬼子、零崎人識は激突する。

そして、こことは一切違う別の場所でも。

「あなた誰なんですかあ？」

「私ですか？ 私はあなたと同じ零崎です。とは言つても、未来から来たんですけどね」

「わあ！ 」 いつも驚きです！ ていうか未来から来たのってホントのホントなんですか！ ？」

「ホントのホントです」

「ホントのホントのホントに！ ？」

「ホントのホントのホントに……って」 れじや埒が明かないでしょう。舞織さん」

零崎舞織 否、無桐伊織の前に佇む一人の女性。

その女性は背丈の面でいけば、伊織に引けを取らないほどである。両腕にピンクのリボンを巻きつけ、更に黒の燕尾服のようないものを身に着けている。ピンクのショーツスカートに首元には大きなピンクのリボンを蝶ネクタイのようく装備。

髪の毛は長く、青色だ。そしてその髪の毛の上に赤のカチューシャ。目の色は黄色と橙色を混ぜ合わせたような色合いである。

「そうですねえ。で、誰なんですか？ アナタは」

「私は零崎高織。試させてもらいますよ伊織さん」

「試す？ わたしをですか？」

「ええ、もし勝てたら零崎人識さんの所へご案内します」

「わお！ 人識君のいる場所へ連れて行つてくれるんですか！？」

高織、と名乗る女性は首を縦に振る。それは了承の証。そして、高織は口元を軽く歪めるかのように尖らせる。

「まあ、私も柔じやありません。今の伊織さんと……どちらが強いのか……気になるだけですから」

「は？」

「いえ、何でもありませんよ。では始めましょうか」

そう言つと、自身の服の中 脳の燕尾服に手をいれ、茨のついたまるでどこぞの女王様が使うかのよつな鞭を取り出す。

そして、伊織もまた『自殺志願^{マイントレンデル}』から受け継いだ大鍔を取り出し、口に銜えた。

伊織は言つた。

「それでは、零崎を開始します

答えるように高織も言つ。

「では、零崎を発生させます」

それが両者激突の合図となる！

「どうか？」零崎一賊をかつて滅ぼした橙々なる種は、別にそう

「で、やはり、連中も追いかけてきた」か

「ええ。面倒なことこの上無いわ。アンタのバカのよつたな癖が仇になつたのよ」

「いいじやないか。どうせバレるのは時間の問題だ」なら、始めから晒した方がいい。違うか？」

「違わなくはないわ。でもそこはやはり、成功率の高い方を求めるべきよ」

「世界のどこか。どこでもないどこか。

彼らはそこに潜んでいた。

逃げるよつに？

隠れるよつに？

好機を見出すために？

否、その全てが違ひ、また全てが正しい。

ただ、変わらない現実。それは

彼らがいがなる言葉を使って説明しよつともそこには、彼らはこる、
といふ事だ。

どこか。

場所など分からない。

場所が分かれれば大問題。

「 いう事を気にしなかつたらしいじゃないか 」

「 あれはあれ。 橙々なる種の能力値が異常だつだけよ。 私達は仮にも生身の人間 普通の肉体をしてい。 どう考えたつてアンタも橙々なる種に勝てるなんて まず思わないでしょ ? 」

「 そうだな。だからこそ、俺は手に入れたわけじゃないか 」

「 ただけどね…… 」

「 まあいいさ。 連中を泳がすのもいい。 ただ、最後に 最後に勝つのは俺達だ 」

この物語は謎解きなど無い。

この物語は戦闘しかない。

この物語は零崎一賊を巡る物語だ。

そして、後の人々はこの騒動をこう呼んだ
『零崎行識の人間
旅行』と。

序章（後書き）

本作は色々と試行錯誤も重ねつつ書き上げていくので色々と修正箇所があるかもしれません。
もし気になる点を見つけられたら感想なりいただけると有り難いです。

それではまた次回。

第壹回目 零崎行識VS零崎人識（前書き）

今回は行識と人識の対決です。

といつても、初の戦闘シーンなので今回は割合控えめにしてあります。

そこはござ承下さい。

恐らく次の戦闘辺りから激しさを増す事になると思いますので。

殺し名には一般的に拳銃といった飛び道具は通用しない。理由は単純明快で、拳銃の引き金を引く速度と拳の届く速度、どちらが速いか 答えは単純で後者が多いはずだ。

そして、殺し名の半数以上のプレイヤーが後者の位置づけにある以上、飛び道具を使おうともそれを避ける術の一つ二つ、所持しているはずである。

だというのにも関わらず 零崎行識の使う武器は恐ろしく、そして同時に理解の範疇を超えていた。

未来の零崎の長、零崎行識と現存する零崎が一人にして、零崎の鬼子、零崎人識の一戦はとても一方的だった。
いや 一方的ではない。正しく言つなれば、決着は事実上既に着いていた。

たつた、二回の攻撃で。

「……有り得ねえだろこれは」「有り得ないも何も、これが現実です」

人識の言葉に行識は平然と述べる。人識の手に握られるはナイフ、そして行識の手に握られる得物 それは拳銃だった。
どこにでもありそうな全身を黒で塗りたくった拳銃。

「いくらなんでも無茶苦茶だろテメエ……俺の行動全てを見透かすかのよう銃弾を放ちやがって」

「それが僕の力ですよ人識さん」

行識は一言でそう簡潔に言い切る。

そう、たつた一発の銃弾が、たつた一回の攻撃が決着を着けたに等しい。

零崎行識は零崎人識を完全に封じ込めた。

それが今の拮抗状態の原因である。双方が動けないのではない。一方的に、人識を行識は封じ、押さえ、そして、潰している。生殺与奪の権利を既に行識に全て取られていた。

『何じゃ、もう決着か？ 人識も大した事無いの』

『じゃあテメエが戦^やつてみやがれ。コイツの強さは尋常じゃねーよ』

『かつつかつか。行識の強さはワシもよう知つておる。まあワシはそれ以前に幽靈^{マジ}。銃弾なんぞ効かぬがな。かつつかつか…』

『テメエ、本気でぶつ潰す！』

マジギレの人識がいた。

幽靈相手にマジギレするのも少々癪な部分もあるだろうが、そこは仕方の無いところがあるだろう。

『零、言いすぎ』

『お前さんはイチイチうるさいの、行識。良いではないか、高織もおらぬのにワシは退屈じや。遊び相手の一つや二つは欲しいわい』

『俺は遊び相手じゃねーよ…』

しかし、よくよく考えてみれば人識は一度も攻めという攻めを攻撃そのものを許されていない。

力の差は 最早歴然である。

「テメエ色々と滅茶苦茶だぜ……」

「滅茶苦茶で結構です。では」

行識はその言葉と共に駆け出す。駆け出すと同時に彼は銃を学生服の内側へ入れたのだ。

そして左手で銃を入れた場所とは反対側から一つの武器を取り出す。それを人識は見た事があつたのだ。

だからこそ人識は衝撃を受ける。それは 彼の認識上、『欠陥製品』が持っていたはずの物だから。

「それは……」

人識の動搖は勿論、行識にも伝わる。動搖を気にしたか、彼もまた立ち止まり、述べる。

「ん? どうかしましたか? この刀子。以前拾つたんですよ」「拾つたつてお前……傑作すぎるだろ」

「事実は事実。この武器を『存知なんですか?』

「そいつは『無銘』むめい。欠陥製品が持っていたはずだ」

「欠陥製品……またですか」

「また?」

「いえ、なんでもないです。ふうん……『無銘』か。この刀子にそんな名前があつたなんて知りませんでしたよ」

行識は《無銘》をまじまじと見つめながら、その名を脳裏に刻み付ける。

「まあいいです。この『無銘』は今僕のものだ。武器はあるべき主人を選ぶとか、以前どこかの書物で読んだ事があります。『無銘』という名が付けられている以上は、名高い職人が作ったに違いない。そして『無銘』は今、僕という主人を選んだ……それだけですから」「どこの書物だよそりや」

「覚えてないです」

「覚えてないのかよ、そこ！？」

『かつつか！ 行識の記憶力の悪さは天下一品じゃからのお。かなり悪いぞ？ 最悪、昨晩の飯すら忘れておる。ひどい時は數十日前の事も忘れとるの』

「ゼーラお？」

行識の視線に零は完全に目をそらす。幽靈だというのに冷や汗が見えてしまつような錯覚に襲われる人識。

「まあいいです。試合再開といきましょう。長話はまた後で」「だな。さつさと殺して解して並べて揃えて晒してやりたい」「では行きます」

「来いよ」

刹那、行識と人識 両者の持つ得物がぶつかり合つ。響くは金属音。

両者の攻撃は何一つとして掠りもしない。

両者の攻撃は何一つとして直撃しない。

両者の攻撃は得物同士が交錯するだけだ。

両者の攻撃は 最早戦いと言えるようなレベルではなかつた。

人識が攻撃に転じれば、すかさず行識は防御の方へ回り、隙を見つけては両者の攻防は常に逆転していた。

そう 互角なのだ。

ナイフの扱いでは既に超一流の域に達している人識と互角に渡り合つなど 考えられない。

「 一体何なんだよテメエは！ 傑作すぎるぜーーー！」

「 人識さんにそこまで本氣で言わると光榮ですよーーー 弟子として も ねつ！」

「 弟子イ！？」

つばぜり合ひ。やう、つばぜり合ひの中 行識は言つたのだ。

“ 弟子” と。

つまり、それがどうこう事なのか 瞬時に人識は理解できたはずなのだ。

傑作すぎるだろ、そりゃ

「 俺は俺自身の手でテメエを育てたってのか？ そいつあ傑作だろ！」

「 傑作すぎて末恐ろしいと言つはずだ 本人も言つてましたよつ！」

「！」

その言葉で行識は一気に押し込む。つばぜり合ひの中で彼は一気に攻めに転じたその瞬間である

『 行識、いかん！』

「 え ッ！？」

零の言葉に行識は人識から田をそらす

そんな行識の視界に突如として映る一本のナイフ。それは既に眼前に迫っていた。

放つた主は勿論、人識ではない。しかし、弾き返すのには動作が百パー セント間に合わない。

「さあ、祭りを始めましょう 零崎一賊」

そこに、何の前触れも無く、いつの間にか、突然と立つ一人の女性。

背丈は人識とほぼ同じ。紫一色のドレスを身に纏つた長い黒髪の女だ。瞳は衣服に合わせたのか 否、衣服をそう合わせたのだろうか紫色だ。

「わたくしの名前は闇口霊衣。主人の命により、参上した次第」

「靈衣を動かしたの？」

「ああ」

「まああの娘なら上手くやれるとは思つけど……よつこよつてアイツもいるなんて面倒な事この上無いわね」

「まあ……アイツなら上手くやれるだろ？が一応警戒はしておくれべきだな。かつてのプレイヤー、直木飛緑魔風なおきひえんまに言つなりば、『零崎行識は恐ろしく強い可能性』だな」

「過大評価でしょ」

「過大評価じゃない、これくらいは普通だ。特にアイツを初めて見て 戦つたヤツは皆死んでる。それを忘れたか？」

「忘れないわ。『零崎の霸者』なんて異名 あんまり好きじゃないのよ」

「霸者とこつのはまあ、『最強』と同じだからな。その意見には同意しよ」

「で？ 灵衣がしくじつたら？ 零崎行識は 危険すぎるでしょ。零崎人識だけならまだしもと言え」

「そこは靈衣に任せると。俺はアイツの成り行きを見守る事しか出来ん。最悪の場合 僕も行く」

「そうなつた場合は やけに早い出陣つて事になるわね」

「靈衣ちからが終わらせてくれる事を信じるしかあるまい。零崎行識の持つ能力

時に干渉できる力を打破して

静かにそんな声が響き渡るのであつた。

(零崎行識／＼零崎人識 強制終了)

第壹回 零崎行識VS零崎人識（後書き）

今話のテーマ

零崎行識VS零崎人識

すばりこれです。

タイトル通りですね。

プロットでも最初の対決は彼らにするつもりでした。

そして早速、新キャラの闇口靈衣が登場です。

この名前は突如として降臨した名前でした。

因みに僕は学生なんですが授業中に突然キターッ！…といつ感じで。

そして、未だに一切の謎が不明な最後を締めくくる会話。色々と伏線は多く張り巡らせておりますので独自の妄想という名の推理で先の展開を予想されても如何でしょうか？
多分楽しくなるんじやないかと思います。これは本作のみならず全ての作品に言える事ですが。

ではまた次回、お会いしましょう。

第貳回 零崎高織VS無桐伊織

零崎高織と零崎舞織 否、無桐伊織。

両者に共通している点は非常に分かりやすく、簡単だ。それは 数少なき零崎の女性であるといつ点である。

これをどいどいの『生涯無敗』が聞けば、ある意味でじれほび歓喜するのだろうか想像を絶する。

しかし、もう一つ言える事がある。

それはどちらも 純粹な零崎なのであるといつ事。

流血の繋がりである零崎一賊。

そんな二人の激突が始まっていた。

「こんなはずじゃないでしょ……！」

零崎高織は逃走していた。

規格外だったのだ。相手が。

無桐伊織 否、零崎舞織は仮にもこの時代に存在する事実上最後の、生粋の零崎と言つて過言ではない。

故に、だからこそ たまりにたまっていた殺人衝動は凄まじい。

大厄島での戦闘で全ての殺人衝動が解消されたのか 答えはNOだ。

さらにそれからまた蓄積されたものを考慮すると大厄島ほどは無くとも、相当な量の殺人衝動を伊織は抑えていた事になる。

「これが……最後の”零崎の力、……」ここまで凄まじいなんて！
噂に名高い自殺志願が　　噂に聞いていた零崎双識の探し当てた最後の一人！」

だが、高織は全てにおいて規格外の動きを見せる。
暴走する力　　その力を抑え込まないと彼女の対峙する敵とは戦えない。

彼女は打破するしかないのだ。逃走など、零崎の　否、彼女の恥だ。生き恥である。

高織は自らの得物である茨の鞭を構え直し、暴走する伊織と真つ向から向き合つ。

「私の刺鞭が勝つか、伊織さんの『自殺志願』が勝つか。結果は神のみぞ知る、といふところでしょうね」

時間軸を少し戻そう。

といつても、僅か十分程度の遡り。

戦いは高織が優勢だった。いや、圧倒的に有利だった。
高織がどれほどの実力者なのは分からぬ。しかし、伊織はまだルーキーなのだ。

そう、ルーキー。

無限の可能性を秘めつつも、一方では実力者に勝つなどまず有り得ない。そんな存在。

しかし、伊織は自らの可能性を自らの手で掴み取ってきた。それは今回も変わりず。

「……これが伊織さんのこの時代での実力ですか？」

「そーみたいですねえ。困った事にわたしの実力ではどうやら勝てそうに無いみたいですねえ」

「……ですね。では とりあえす」

死んでもらいましょうか、どうぐ普通に、常識かのようこ、淡々と高織は口にする。

「人識さんとの遭遇、それはすなわち 一賊の終焉の時なんです。まあ、アイツの言つていた事ですけど。とにかく、足手まといになると厄介ですし、私は伊織さんをガードする自信は無いです。だつて」

面倒だから、と高織は付け加える。

高織は面倒臭がり屋だ。勿論、ある程度なら面倒を見たがるが、たまたま伊織はその条件を満たしていない。
まるで少女趣味ホルトキープと呼ばれた零崎曲識ゼロザキマガシキが殺人を犯すために満たされる条件 それと似たように。

勿論、色々な意味で一切かみ合つてこそいないが、しかしそれでも共通していないからこそ 条件を満たす必要性という部分だけでも充分な共通点であろう。

「まあ人識さんに会えずに死ぬというのも本望で無い事は分かつてます。でも、変わらない現実はあるんですよ。あなたが間もなく死ぬという、現実は微動だにしない」

高織が今まさに伊織に手をかけようとした瞬間、一気に戦局は変

わった。

瞬間、伊織の殺意 殺気が一気に膨れ上がった。

理由など分からぬ。だが言える事があるならば伊織の殺意が限界を 頂点を超えた事になる。

「

！――！」

そして戦いは一気に変わる。一気に変化する。
かつて大厄島で闇口憑依と対峙した際、彼女はその圧倒的な殺意
により実力差全てをひっくり返した。

殺意一つ。されど殺意一つ。

「これは刺鞭。^{ローザリーテイク}私の持つ得物の一つです。まあ 言つても無駄で
しうけど」

高織は言葉をかける事をとうの昔に破棄した。
既にそれが通じる状態ではない。

「行きます」

「まず第一撃。

刺鞭ローゼラティゴを高織ローゼラティゴが振るう。

しかし、伊織はそれを難なく避ける。その軌道を理解しきつているかのように。

その鞭が、攻撃がどこへ向かうのかを完全に把握しきつっていた。十分前の伊織では最初の第一撃で既に混乱できたというのに、これはあまりに恐ろしい違いだ。

そして同時に高織は悟る。

これが零崎なのだと、いう事を。

「

「！――！――！」
「刺鞭ローゼラティゴが効かないならば、樹槍トウイグケアで試すのも一つの手かしら」

そんな事を一人呟き、高織は刺鞭ローゼラティゴを即座に仕舞い、どこからともなく、木の枝を取り出した。しかし、その矛先は鋭利である。

そう、まさしく樹の槍。それが樹槍トウイグケアである。

「最も、樹槍トウイグケアで何とかなるなんて保障 どこにも無いんだけどもね」

高織は駆ける。

彼女にとつてこの戦いは復讐だ。

大切なものを、彼女の大切な人を奪い取つたあの憎き怨敵を殺してしまわなければ気が済まないほどの復讐心。

かつて零崎人識から高織は自身が京都で連續殺人事件を起こしたと聞いた。理由は教えてもらえたが、高織は零崎にある殺人

衝動を抑えきれなくなつたのだと考えた。

勿論、本当は全然違うのであるがここはそれを語る場所ではない。

「私の大切な師匠を 大切な人を奪い取つたアイツらを私は許す
わけにはいかない。だから私は逃げるわけにはいかない。逃げたら、
私は師匠に顔向けできないのだから ッ！」

高織は樹槍トウイグケアを片手に携え、駆け抜ける。

しかし、伊織はそんな彼女を遙かに上回る行動を見せる。

樹槍トウイグケアを『自殺志願マインドレンデル』で切つたのだ。

「なッ
！？」

全ての全てが規格外。
全ての全てが予測外。
全ての全てが観測不能。
全ての全てが 想定外。

それが無桐伊織の持つ可能性だ。

そして、『自殺志願マインドレンデル』の刃先が高織を今まさに襲うという時。

その動きが突如として止まつた。

そう、無桐伊織はある赤き最強との契約で人を殺せない。
否、殺す事を制限された殺人鬼なのだ。

「……いけません、いけません」

それはまさに、かつて大厄島で彼女が口にした言葉と同じだった。
それを高織は知らない。だからこそ、伊織の言葉の意味を彼女は

理解できなかつた。

「危ないです危ないです、間違つて殺してしまつといひました」
(……やはり変わつてゐる……)

初めて会つた時からずつとこんな調子だつた。と高織は連想する。
無桐伊織。それは彼女の 高織の知るところでは全滅した零崎
一賊の中の生き残り。

同時に、彼女が強く憧れていた人物である。

「私の負けですね……」

そう、この瞬間伊織の全てを高織は見て、口にする。それは清々
しいまでの降伏宣言だつた。

「零崎人識さんのところへご案内いたします、伊織さん」

「わお！ やつとですか！」

「では行きましょうか。早くしないと最悪私達の側に来なかつた以
上、アイツらの刺客が人識さんのところへ向かつているかもしだ
せんし……」

と、そこまで言いかけた時だつた。

それは突然現れる。

そう、何の前触れも無く、何の前置きも無く、まさに唐突。

「あたしに黙つてなあに面白そつた事始めてんだ？」

その言葉に伊織は震え上がつた。顔が一気に青ざめる。

高織はこの唐突な声の主が誰なのか理解できなかつたが、それを
すぐに把握する運びとなる。

「あ、あ、あ、哀川のおねーさん…………！」

伊織の言葉に精神を揺さぶられたように、高織も声を荒げる。

「あ、哀川つて…………まさか、『人類最強』の哀川潤！？」

そう、人類最強の請負人にして死色の真紅。赤き征裁、砂漠の鷹、疾風怒濤、一騎当千、赤笑虎、仙人殺し、嵐の前の暴風雨 といつた様々な異名とその数々の武勇伝と伝説を持つ人物 哀川潤の登場である。

「なあ、哀川潤についてどう思つ？」

「突然ねえアンタも。えーっと、哀川潤だっけ？ あれはもう『最強』でしょ、やはり」

「ああ、確かに『最強』だ。といつより、『最強』以外に述べる言葉が見つからない」

「ところで、何でまた哀川潤の話題を出したの？」

「いや、俺はあるの存在を、哀川潤を相手取った事があるんだがアレは強過ぎる。『最強』という言葉を思い知つた。しかし、俺は一方で思つ。あれを『最強』と言い切るのは早すぎるのではないか、とね」

「なんですよ」

「『最強』は常に『最強』でなければならない。しかし、哀川潤は全勝していない。かの樽の『結晶皇帝』^{クリスタルガイザー}、六何我樹丸は『生涯無敗』^{りっかがじゅま}だと聞いているからな」

「『生涯無敗』と『人類最強』。確かに考えてみればいかなる物を貫く矛といかなる物を貫く矛の激突ね。あ、いかなる物を通さない盾といかなる物を貫く矛か」

「そう。この二人が激突したとかよくは知らないがその結末は闇の中だ。真相を知る者はもう誰もいないからな」「で、結論から言うと何が言いたいのよ?」

「哀川潤を『最強』と俺は言わない。ただ、それだけだ」

それは、断定的な口調だった。

(零崎高織 VS 無桐伊織 勝者、無桐伊織)

今話のテーマ

- ・零崎高織×S無桐伊織
- ・哀川潤、登場！

今回はこの2つでした。

といつても、哀川潤じゃなかつたです、潤さんはほんの少しの登場となりましたので本格的な登場はまた後々という事になります。そして、今回の話のラストを締めくくつた一言は凄まじい一言だつたと思います。

潤さんの皿の前で言つたら恐らく一瞬のつぎに躊躇される事間違いなし！

まあ、次回は行識に戻していきたいと思います。

といつより、第壹回の続きじゃないのかよ！と今回の話を見て感じた方も多いと思いますが、これら2つは今回のストーリーで一番最初に行う戦闘シーンでしたので勘弁していただきたいと思います。では、次回お会いしましょう。

第三回 亂世の衣（前編）

今日は行儀サイトに話を戻してお届けします。
それではじめ～。

ナイフが襲い掛かる。

身体の反応は時として物体運動を遙かに下回る。

それは世界にとつて不条理ではなく、理に乗つ取つてゐる。

迫るナイフ。

命中まで、残り 0・5秒。

だが、行識は咄嗟に 目を見開いた。

瞬間、ナイフが静止する。行識はその一瞬を利用して、ナイフの直撃する箇所から動き そしてまたナイフが動き出した。

「い、いつの間にそこに……」

人識は酷く動搖している。

人識には一切の事が分からぬ。気付けば、行識は一瞬で移動したように見えたからだ。

「流石ですね、零崎行識。我が主人が最も恐れる男」「それは光栄だね……」

突如として現れた女性 様子が一変していた。

人識とのつばぜり合いですら一切の息切れを見せなかつた彼が肩で息をしているのだ。

『人識、すまぬが行識を援護してくれんか』
「ああん？ どういう事だよ？』

零の言葉に人識は疑問符で返す。

『行識には、時を操作する力があるのじゃ。じゃが、しかしそれを使うと行識の体力は一気に削られる。ある程度のコントロールは簡単じゃが、その物体の時を一時的に静止させたりしてしまえば、ある程度タフである行識でもかなりの体力を消耗する。大方、あの靈衣とやらの追撃を避けるべく、一瞬、周囲の時を完全に止めおつたのじゃよ。行識は』

「時の操作？　おい、傑作すぎるだろそりゃ……」

『恐らく、ある程度は戦えるじゃろうが、何せ相手は殺し名序列第一位の闇口。下手すれば行識が返り討ちに遭うかもしれんな』
『その幽靈と思われる存在にひとつ忠告しておきましょ。この状況下ではいかなる手を使おうともわたくしを打破する事は不可能と判断します。わたくしの中での最大の脅威、零崎行識は相当疲弊している。先の攻撃は効果がかなりあつたようですね』

闇口靈衣は冷たくそう言い放つ。

その周囲を包むのは冷氣と述べても過言ではないほどの絶対的な威圧。

人識は生まれきつて生粋の零崎なのであり、殺し名としての歴もかなり長い。

そんな人識が、その威圧感に一瞬、呑まれかけた。

恐怖。戦慄。慄然。

背筋は凍るし、足もすくむような感覚。岩陰があれば、その陰に身を隠したいほどだ。

それほどの絶対的な威圧感である。

「まあ、零崎行識を殺す事が出来れば、我が主人の野望も完璧に、完膚なきまでに成就が約束される。零崎行識。あなたを殺す事、そして、『零崎一賊』を絶滅させる事。それこそが我らの目的」

「おいコラ待て。何が一体どういう事が説明してもらおうか。俺、ちーっとワケ分からなくなってきたぞ」「死ぬ者に語ることなどありません。確か 零崎人識、と言いましたか」

「確かになんだよ、確かに」

『人識よ、侮ってはならん。あの者の実力は恐らく

「ああ、俺より上だわな」

人識はそこで零の言葉を切るように口にする。

しかし、一方で人識もナイフを構える。ナイフを持つ腕を目と同じ高さにまで合わせ ナイフを闇口靈衣に突き立てるような形で人識は言つた。

「闇口靈衣。あなたを」

『お前さん、まさか……』

「……なるほど」

零は驚き、そして靈衣は戦闘態勢に入る。そして 人識は言つた。あの言葉を。

「殺して解して並べて揃えて晒し ツ！？」

「そんなものを言わせるわけが無いでしょ？」

不意打ち。

そう、不意打ちだ。零崎人識の零崎開始の言葉を言い切る前に闇口靈衣は奇襲を仕掛ける。

勿論、ある程度戦闘態勢でいた人識ではあるが、靈衣の攻撃はその人識の判断力を上回るほどの攻撃速度。

裏の世界 暴力の世界そのものを否定するような言葉だ。

名乗りそのものが一般化しているわけではないが、それでもこれ

が比較的人識の中ではメジャーであった。

だが、靈衣は それすらを上回る。奇襲がないと思っていたわけではない。しかし、奇襲にしては速過ぎる。

「死になさい、零崎。あなたの死は野望成就の糧と
「そんな事をさせるわけがないでしょ」

否、行識が間に入り、《無銘》^{むめい}で靈衣の攻撃を ナイフの一撃を相殺させる。

靈衣は舌打ちをすると、距離を置いた。
間隔は 10m程度と短い。

「零崎行識に零崎人識。2人同時となると多少不利かもしませんね まあ問題ないです。わたくしには 」

これがありますから。
それだけ言うと、彼女は懐からナイフをもう1本取り出す。
闇口靈衣。彼女は確かに強い。
だがそれはナイフを1本持つた状態で既に充分過ぎるほど。だが、
彼女は 2刀流のプレイヤーなのだ。

「わたくしに2本のナイフを持たせるほどの連携力 とまではいきませんがわたくしも一応はプレイヤー。全力を持ってお相手しましょう。全力を持って破壊させていただきます」

否、闇口靈衣の姿が消失する。
すぐさま周囲を見渡す行識と人識。しかし、闇口靈衣はどこにも見当たらない。
行識は零に言った。

「零、特定できる？」

『つむ、この周囲からは動いておらん。しかし……闇口靈衣といつ女、信じられんな。ここまで実力者とは』

「正直、傑作すぎるだろこれは」

「ええ傑作ですね」

『行識、人識。ワシがお前さん達を援護する^{サポート}。闇口靈衣の技とて完璧ではないからの。目には目を。靈には靈を。じゃ』

「駄洒落じやねえか！！」

こんな感じで零崎行識と零崎人識の共同戦線が締結される。闇口靈衣は冷静だ。今のやり取りも全て見ていた。こんな同盟で自分が敗れるという確証は無い。

寧ろ逆だ　勝率が上がった、と判断する。

しかしそれでも闇口靈衣は至極冷静。そう、静かである。静かに、冷たく、主人の奴隸となり、主人の所有物となり、そして　主人の命を実行する。

それが彼女の属する　『闇口衆』。

（しかし、それでも　確実に。ここは零崎　）

『行識、後方じや！　後方にある！』

零の言葉は唐突。闇口靈衣は目を見張った。自分へと迷わず攻め立てる零崎行識と零崎人識。

何の迷いも無く　特攻を仕掛ける。

靈衣は油断などしていなかつた。足元をすくわれないようにもした。

では何故　それはまさしく、一瞬だった。

零が、闇口靈衣がやつて来る周期を完全に見切っていたからであ

る。

そう 閻口靈衣のルートを完全に読み取っていた。 閻口靈衣は相手の事を感知するために、2人から遠く離れる事が出来なかつた。 だからこそ捕捉。 だからこそ 発見だつた。

(これは……終わりかもしませんね)

既に決着は着いた。 2人の速度は、今から靈衣が動いても間に合はしない。

靈衣は静かに目を閉じようとしている まさにその時だつた。

「そんなもので諦めてもらつては困るぞ、靈衣

「 「 !? 「

突然として響く男の声。

そして気付けば、零崎行識の左腕と零崎人識の右腕は1人の男の両手がそれぞれ掴み 動きを止めていた。

そして 行識はその声に聞き覚えがある。 いや、行識だけではない。 閻口靈衣もまた 聞き覚えがあつた。

いや 聞き覚えるのが常識、 というレベルの話だ。

震える声で行識はそ、そ、そ……と言つ。

そして、その人物は静かにその両腕を離す。

その直後、行識はすぐさまその人物と対峙するよつに背を向く。 行識は言つた。

「空時元雨！……」

「げ、元雨様……」

激昂する行識に、腰が抜け切った闇口靈衣。

零崎人識は静かに その背後を、空時元雨を見る

。

(零崎行識 & 零崎人識 VS 闇口靈衣 強制終了)

第参回 闇口靈衣（後書き）

ところで、ここで今日は新キャラの空時元雨そらじごんうが登場です。

次から次へと新キャラが多く出てきたら混乱しているかもしだれませんが許してください。

そしてこの空時元雨は一体何をしでかすのでしょうか？

描写だけで闇口靈衣以上の存在だといつ事は理解戴けると思いま

す。

その他諸々の事はまた次回で。

空時元雨。

その人物を一言で言つなら、不可解極まりない。

ボサボサの黒い髪に紺色と黒のタートルネック、黒の革ジャンに黒のジーンズ。両手を黒の手袋を着け、少しチーンがジーンズに着いており、その下を紐のついた長いブーツで支配していた。だが、その全てを一蹴するよつに圧倒的なまでの不可解さを出していた元凶。それは黒をここまで極めきつたというのにその真逆をいく、白き仮面を顔面につけていた事だ。

眼の部分と口の部分、そして鼻と思われる部分が少し空洞なあたり、そこから様々なものを見たりするのだろう。そういう予測自体は極めて簡単である。

しかし、一方でこの人物　空時元雨の考えは一切分からない。
それが　零崎人識から見た第一の印象だった。

そう　不可解なのだ。顔に面など、どこの人類最悪を真似ただらうか。

そんな事を気にしたのか　いや、まず気にしていないだろう。

空時元雨が口を開いた。

行識に圧倒的な殺意を向けられているのにも関わらず、だ。

「靈衣、いつまでそこにいる。」こは俺が抑え込もう。お前は先に帰還している。今のお前は足手まといでしかない。まあ　お前の新しい可能性を見られただけで、俺は満足だが

「りよ、了解しました」

そんな言葉を靈衣が零すと　悔しそうに、何よりも不服そうに

零すと一瞬にして消失した。いや、消失したとこよりは闇口の暗殺術の一つを使用したのだろう。

空時元雨は静かにその顔を 人識と行識へと向ける。

「空時元雨…… いつもあつあつだ」登場願えるとはね。ラスボスじゃないのかい？」

「いきなりメタ発言は勘弁して戴きたいな。まあ ラスボスなんだろうけどよ、俺は」

「メタ発言を初っ端から一人とも交わしてんじゃねえよ……」

鋭く刺さる人識の突っ込み。

まあ、両者の発言がメタ発言に変わりは無いので人識の言葉も理解できなくはない。しかもそれが敵対する者同士の第一声なのだからなお更だ。

どうせなら少し話した中でして欲しいものである。

「さて…… 初めましてだね、零崎人識君。俺の名は まあ大方理解こそしているんだろうが改めてさせてもらおう。俺の名は空時元雨。先の闇口霊衣のご主人様 といえば色々と説明はつくだろ？」

「おい、アンタ なんでまた零崎一賊を完全壊滅させようと企む？」

「ん？ なんだ霊衣のヤツ 言わなかつたのか。まあいいさ、俺も今は語るときでない事くらい理解している。その行識君は今にも俺を殺したくてうずうずしているんだろうが、まあ今の行識君では俺を殺す事は絶対に出来んよ。俺は彼に一度勝つている。どうせ同じことになるのがオチさ」

「そんのはやってみなければ 分からないじゃないのかよ？」

「いや変わらない。今の君達二人が同時にかかってこようとも君達程度の実力で俺を倒す事は不可能」

「空時元雨……！」

一方で、そんな言葉を漏らす行識。そんな彼の右手に握られているのは拳銃。左手には刀子《無銘》。

今にも襲い掛かりそうな まさに一触即発とした雰囲気の中、空時元雨はくつくつと笑い

「懲りないなあ、行識君。君とは以前対峙した時に教えてやつたじゃないか。君程度の実力でこの俺を仮にも殺そうとするなど 不可能だと。君はその時に死に掛けている。それを忘れたのか？」

「あの時の僕とは違う。あの時のようにはいかない」

「自信満々だな。こちらは今のところ君と戦うつもりはさらばり無い。今の君を相手取るのも悪くは無いが、どうせならもう少し張り合えるくらいになつてから相手になろう」

「今ここでアンタの時を破壊してやってもいい」

「くつくつく……時の破壊、ねえ。考えてみれば君にどうしてそんな力が宿つたのか 聊か不思議でしかない。まあ、それが運命という事かな」

空時元雨 零崎人識は感じていた。

空時元雨は直木飛縁魔よりも、生涯無敗の《結晶皇帝》、六何我樹丸よりも 表に出ない強さでは彼が見た中で過去最強の実力を持っているだろう。

表に出ない強さ。しかもそれが並の殺し名を遙かに上回っている。この男は 空時元雨との直接対決は今の彼ら一人にとつて危険なものだと、人識は判断した。

「行識。そいつに手を出すな」

「……どういう事ですか？」

「そいつの強さは並のレベルじゃねえ。並の殺し名を遙かに凌駕してやがる……下手に戦えばコツチが本気でやられるぞ」

酷く冷静に言つた人識。それがあまりにも不審に思えたのだろう。行識から殺氣が抜けていくのが見えた。警戒そのものをしている事に変わりないが、自分から仕掛ける事が無くなつただけでも大きいだろう。

それを見た空時元雨は再び笑い そして言つた。

「いい選択だ、零崎人識君。この俺と戦わない方がいいという選択肢は極めて正しいといえるだろう。まあ、行識君も俺の いや、俺達の事を知らないだらうから説明を軽めに挟ませてもらおう『さつきから黙つて聞いておれば、お前さんは全く持つて意味が分からんの』

「お前ほどではないや。……といつか幽靈を連れているとは……驚かされるばかりだ」

『ほお、ワシを見て驚かぬか。中々根性が座つてある』
「別に。幽靈」とき探せば一匹一匹といだらう。その程度の価値だ。まあ、珍しいといえれば珍しいだらうけどな

自論を持ち出しつつも、零に対して驚きの色一つ見せない空時元雨。

「しかし変わつたペツトだ。誰のだ？」

『ワシはペツトではない！』

「あ、僕のペツト

『お前もか、行識イイイ！』

零の頭から湯気のようなものが一瞬見えたが、人識はそれをスルーする。イチイチ突つ込んでいたら身が持たないような感じがする、というのが最大にして第一の理由だ。

「さて、では本題に戻そつか。俺達は救世主^{メシヤ}。そして俺はその救世^{メシ}主^アのリーダーである。俺達の田論見は、まあ気にしなくていい。時に人識君、君は疑問に思つたことは無いかい？」

「ああん、何がだよ」

「何故、暴力の世界で、いや、呪い名に零崎と対をなすものが存在しないのか。気にした事は無いかい？ 疑問に感じた事は無いのかい？」

「何？」

「殺し名は七、呪い名は六。考えてみれば釣り合わないじやないか。第三位の零崎は、対極も無い」

「んなもん知らねーよ」

「知らない、か。まあそれはそれでいいだろうな。だが、俺はその存在を認めるわけにはいかない。ああ、分からなくていい。今の君に理解してもらおうなど思つていね。微塵ともね」

空時元雨はそう言い切ると、一人に遂には背を向けた。立ち去るつもりなのだろうか。

彼は言つ。

「さて、これで時間稼ぎも出来た。間もなく『赤色』が物語を搔き回しに来るだろう。まあ、それくらい計算は出来ている。君達は赤色と会う事だ。色々といい経験になるだろう」

「赤色つてまさか……」

顔色がどんどん青ざめていく人識を他所に、空時元雨は断言するよつに、はつきりと言つた。

その名を。

「ああ 哀川潤、だ」

否、轟音が響き渡る。

彼ら二人の背後からそれは響いた。

「なるほどねえ……」いや面白い事になつてんじやん

二人は振り向く。彼らの目の前にいたその存在は 空時元雨といふ存在を一瞬でどうでもよく思わせた。

それほどの人物。それほどの力を持つ人物こそが、哀川潤。哀川潤は、零崎人識の持つナイフを一瞥すると、

「なあに約束破つてんだよ、零崎クン？」

静かに微笑みながら言つ。完全に田は笑つていなかつた。
人類最強の請負人、哀川潤。満持しての参戦である ！

「まあな。それを本気で視野に入れなければならなくなつた、とい
う事さ。それともう一つ……」

「“人類最悪の遊び人”との接触？」

「ああ。俺達の物語を一気に動かすためにあの存在は必要不可欠
だ。奴^{やつ}さんも乗つてくれるだろうよ。俺達のすることは物語を
終わらせる事に直結しているからな」

空時元雨は静かに そう語つた。その仮面の下に映る表情は
未だ分からず。理解不能である。

(零崎行識＆零崎人識 VS 空時元雨 不戦 勝者なし)

第肆回 主（後書き）

今回の話は人識らしをちゃんと出せたかが不安でした。
そして同時に今回は空時元雨というキャラが明細・・・とまではい
かないでしうが結構書けたといい回だったと思います。
次回からは哀川さんが乱入し、どうなるのか？

それはやはり次回以降のお楽しみです。
では！

突然なんだけれど、僕の話に少しばかり付き合って欲しい。

いや、それほど急用とこわけではないんだ。

でも、少しだけでいい。だつて、今しておかないとこいつ事をするタイミングは無いと感つてこる。

まあ、本音のところから書つて、作者をんからいつの時間……
え？ メタ発言禁止？

いやあ、それはちょっと辛いことこの間があるつて。

まあ、そんな前置きはさておきとこいつ。

これからする話は少し前の時の話だ。最も、僕自身は今過去の世界にいるわけだから何だか矛盾が生じてしまつ。だから、訂正しよつ。

これは僕 零崎行識の人間関係を少し話させて欲しい。

……え、これもメタ発言なの？

少年は彷徨つていた。

服には大量の返り血が浴びせられている。衣服だけでなく、細い腕、靴、顔面のいたるところに、返り血があつた。

少年は感じる。

ああ、どうしてこうなつてしまつたのだろうかと。

彼の周りの人間は全て死滅した。町一つ、否、市一つが今や消滅の殺戮による壊滅の危機にあった。

それがまさか、若き少年の仕業だとは思つまい。しかし、彼の返り血を見れば、彼が犯人だらうという判断は充分に出来る。

少年の名は不明。いや、名はある。今は無い。

そう、彼こそが後の零崎行識。当時十一歳の頃の話だ。

殺戮衝動は限界を越え、今やオーバーヒートしていると言つて過言ではない。

もつと言い切つてしまえば彼は零崎として覚醒した、といつべきだろう。

当然、当時の彼に暴力の世界など分かるわけもない。ましてや、今の彼に近寄りうとする人間は

「よお

いた。

少年 行識は見る。その人物を。声は高い方だ。女性だらう。その判断は間違つていない。文字通り女性だつた。

赤い髪にワインレッド色のスーツを身に纏つた全身一色がまさしく赤色。目つきはとても鋭い というか悪そうだつた。

それが行識の第一印象。人類最強の請負人にして、死色の真紅哀川潤を彼は初対面でこう感じた。『不良?』と。

「誰?」

「うつわ。いきなり誰とかひでーなー。で、少年よ。お前は一体何をしているのかな?」

「さあ、分からない」

「分からないとかねーだろ。その返り血。どんだけ人を殺したんだよ、分かつてるか? 今ここ、お前一人のために市民全員に避難勧告出てるんだぜ?」

「そう。妙に人がいないと思つてたら……そういう事」

「へえ、動搖しねーんだな。結構クールじゃん?」「クールとか……どうでもいい」

行識の手に握られる二つのナイフ 一つは刀子《無銘》。そしてもう一つは アンチロックブレード 錠明け専用鉄具なのだ。

その両者を哀川潤は所持していたから知つていて。それを何故この少年は所持しているのか 不思議に感じていた。

勿論、哀川潤も某戯言遣いから話は聞いているから大体の事情は把握できている。

「それ、どこで手にいれた?」

「これですか」

人類最強を相手にぶつきらぼつな反応で返す行識。彼の中にホツホツと湧き上がる感情。

それが殺人衝動だという事に行識は気付いていない。

「さあ、拾いました」

「拾いましたつてお前……」

哀川潤ですら、その素つ氣無い返し方に困惑する。

全てをどうでもよく思い、そして自分の思うがままに動いているこの少年。しかし、哀川潤はそれ以上にこの少年から何かを感じていた。

「ところで殺していいですか？ 何か殺したいんですね？」

「ああ、構わないぜ。殺せるもんなら」

殺してみな。

哀川潤はそれだけ言った。行識がその挑発的な言葉に腹を立てたか否、全く苛立ちは込みあがっていない。

「じゃ行くか」

一気に行識は駆け出した。

その脳内で今、どのような処理がされているかなど、本人にも分からぬだろう。せめて分かるとしたら今の彼は性欲とか食欲とか睡眠欲といった全ての欲望を殺人衝動へ昇華させていく。

一つのナイフが太陽に反射して光る。しかし、彼はここで選択を間違いなく誤っていた。

相手は人類最強 そう、勝てるはずがないのだ。勝てるわけがない。

「少年よ、お前……ちーっと眠つてな」

その一言と共に、行識の意識が途絶える。

何が起こったか、行識自身にも分からぬが 僕はここで死ぬのかなど、行識は思つた。

行識の目が覚めると、彼はスポーツカーに乗っていた。真っ赤な車だった。その運転席にはあの女　哀川潤が座っている。しかし、行識は酷く落ち着いている。今まで奥底に溜まっていた何かが思い切り吐き出されたような爽快感　　そう、違和感を感じていた。

やがて哀川潤は目配せで行識の意識が覚醒した事を確認する。車はどこを走っているのか分からぬ。しかし、どこかへ向かっているのだろう。それだけは理解できた。

「よお、少年。田が覚めたかい？」

「はい、一応は」

「一応、服テキトーに着替えさせておいたから。あたしつてセンスいいだろ？」「…………」

全身赤一色だった。

トレーナーからその上に羽織つているジャケット、更にはジーンズ。普通に考えたらまず有り得ないセットである。行識は田を点にし、同時に苦笑いを浮かべながら

「え、ええ。ありがと、びやこます」

と、一応の礼を述べておく。

勿論、行識はここまで来ると逆に恐ろしいとしか思えなかつた。一つくらい赤色じゃないのがあればマシだつたかもしけないが、全てが全て赤一色（幸いにも髪の毛などは弄られていなかつたが）だと恐ろしいとしか思えない。

「で、今どこに向かつているんですか？」

「今？　さあね。地獄じやね？」

「あなた死ぬ気ですか！？」

「はははは！　冗談だよ、少年。ところで、すっかり殺人衝動も無くなつたみたいだな」

「殺人……衝動？」

「あたしとバトルまでのお前の事だ。人を殺したくて殺したくてたまらない状態だ」

「人を殺したい状態……ですか」

「そう。お前を生かすのに少し苦労したもんだぜ。心停止したくらいだし」

「心停止とか冗談じゃないので止めて下さい……」

何気恐ろしい事を言ひつ。

想像もしたくない。意識が無いまま、そのままオダブツとこうのは一番考えたくない最悪のパターンだ。

「まあ、一応名乗つておくか。少年、お前は名乗らなくていいぜ。黙つてあたしの名乗りを聞いておきな」

「名乗りつて戦隊とかじやないんですから……出来れば普通に聞きたいです」

「哀川潤。職業は請負人だ」

哀川潤は静かにそつ口にした。

「請負人……？」

「まあ何でも屋つて考えればいい。“人類最強の請負人”つて周りからはよく言われる。最近はいーたんが色々と仕事こなすからてつきり減つてんだよな、あたしの仕事」

「いー……たん?」

行識は疑問符をつづつ、その言葉を反復する。

哀川潤も流石に気にしているようで、説明しようか?と親切に言つてきたのでお願ひします、と行識は返した。

「いーたんつてのはあたしの同業者さ。請負人家業をあいつもやつてる。まあ詳しい事は色々と言えないけど、戯言遣いなんて呼ばれてたな。なつついもんだぜ、ありや」

「戯言遣い……ですか」

「ああ。で、少年よ。お前には力をつけてもらおうと想ひつ」

「力?」

哀川潤はこくん、と首を縦に振る。

力と限定しても本当に多種多様だ。知識もあれば、腕力といった力もある。しかし、哀川潤がその中で指した強さは当然、身体能力といった部分だった。

「まず言つておくとだな、少年。お前は『零崎』だ」

「『零崎』？ なんですか一体」

「まあ、普通のリアクションだな。『零崎』つつーのは暴力の世界にある殺し名の一つだ」

「……暴力の世界つてなんですか？ それに殺し名つてすつごい危険な香りしかしませんけど」

「ああ、危険さ。危険だらけの世界さ。あたしも出来る限り、関わり合いになりたくねえんだよ」

「で、その『零崎』と僕がなんで関係あるんですか？」

「『零崎』つつーのは、流血のみの殺人鬼集団。……まあ、あたしも細かくは知らない。あたしより知つてるやつに引き合わせる。ていうか、当人達にな」

「『零崎』の人間に、ですか？ 物騒な感じしかしませんよ？」

「大丈夫大丈夫、あたしが色々と圧力加えてるから。それにあいつら結構面白いしな」

そう言つて、哀川潤は笑う。まるで何かを思い出したように。

くくく、とそれこそ満面の笑みを浮かべていた。

そして、哀川潤はそれに と言いくつ出す。

「あたしは育てに向いてない。小唄のヤローに任せてみたいがお前は真心ちゃんと違う。ステータスとかが一般人だ。どう見ても向いてないだろうし。それに殺人衝動の面を考えれば『零崎』に任せるべきなんだよ。殺人衝動の抑え方とか、ある程度の生き方くらいは

学んできやがれ、少年

「はあ……」

「あ、間違つてもあたしを殺そとなんてすんじゃねーぞ? いやそれ 자체あいつらがさせるわけねえよな」

ますます意味が分からなくなつていぐ。

行識の理解を超えて、もう何もかもが分からなかつた。

「まあとりあえず お前、名前はなんてんだ?」

今更な質問だった。

行識は答える。強い意志と眼光を宿して。

「名前は無いです」

零崎一賊。

殺し名序列第三位にして、殺人鬼集団。

その唯一の生き残り 零崎人識と無桐伊織に彼は会つた。

その顔は今でも思い出したいし、考えたくもない。描写は省略した
かつた。

哀川潤は交渉する、と言つていたけれど、随分と暴力的な交渉だ
つたのを、行識は見て感じた。

十分もしない内に結果は出たらしく、行識の世話は事実上、押し
付けられるようだつた。

「じゃ、頼むわ」

そんな一言を残し、人類最強は去つていいく。

そして、人識は深いため息を吐いてまず第一声に言つた。

「お前、名前は？」

「名前は捨てました」

「なるほど、傑作だ。だったらまずはお前の名前を作るか。《零崎
》としての名をな

「《零崎》としての名ですか？」

人識は相槌を打つ。

行識は考える。しかし、思い浮かばない。当然だ、ノーヒントで
名前を作る事はできない。

しかし、伊織が動く。行識のジャケット裏にあつた白紙のメモを
偶然、背に回つた際に発見したからだ。

「『そいつの名前は零崎行識だ。じゃー頑張れよ少年 b y優しい
優しい哀川潤姉さん』ってありますよ、人識君」

「あんの人類最強……何もかも勝手に決めやがつて」

拳を震わせ、怒りを滲ませる人識。冗談抜きで怒つてはいるのは明
確だつた。

「おい、お前！」

「は、はい！」

「お前には色々と知つてもらわなきゃならねえ事が多い。まずは殺し名の世界。そして俺達『零崎』の事をな」

一切の質問をせずに黙つて聞け　と人識は言つ。行識は黙つて相槌を打つた。

「まず殺し名の説明からだ。とはいっても、俺もそこまで深くは知らねえ。もつとも零崎として今、長生きしてるのは俺だが、それイコール暴力の世界を知つてるとは言わない。だから俺の知る限りの全てを話してはやる。そうしねえと、『新しい』『零崎』を始める事はまず不可能だからな。で、本題に戻るがまずお前は四つの世界そのもを知らないよな。そこから説明を始めるぜ。しつかりとついて来いよ？」

まず、お前が本当にいついたきまで、数日前までいた世界を表世界つつーんだ。これは説明なし。お前が平穀らしき平穀を送つていた世界だからな。次に そうだな、四神一鏡つーのが支配する経済力の世界。これは赤神あかがみ、謂神いいがみ、氏神うじがみ、絵鏡えがみ、櫻神おりがみの五大財閥があれこれしてゐてーだ。あんましカンケーは無いけどな。三つ目に玖渚機関を筆頭とした政治力の世界。ここも説明はパスだ。あんまし知らないからな。で、肝心な部分だ。話についていけてるか？」

人識の言葉に行識は首を縦に振る。

勿論、実際のところは理解が一切追いついていない。

けれども、この時点で一番聞きたい肝心なところが出ていなかつた以上は質問のしようが無かつた。

「で、こつからがお前にとつて最も肝心な暴力の世界だ。心して聞

けよ　俺は同じ事を何度も言つるのは好きじゃねえんだ。分かつた
なら首を縦に振れ」

行識は人識の言葉に黙つて頷く。

そして行識は聞いた。暴力の世界のことを。少なくとも、無の状態よりは知識はあるべきだろう。

ここは、そういう世界だ。

表世界ではなく、裏世界の住民となつた零崎行識にはそれを知る権利と義務が与えられる。

そして、説明から気づけば早一時間近く。そこでようやく人識の簡単な説明が終わりを迎えた。

勿論、もつと語れるだろう。ましてや素人同然の行識が相手となれば語れる以上に語らなければならない。

だが、一気にその全てを網羅させたとして理解が追いつくはずがない。まず人識が教えたのは殺し名と呪い名の二つだった。

こんな始まり方で行識の新しい生活が幕を開ける。

哀川潤と遭遇し、『零崎行識』という名を与えられた零崎行識。人識や伊織と共同生活を開始してから早三ヶ月の月日が経過した。

「人識さん、お願いがあります」

「お願い？」

それは唐突だった。

いつものように起き、人識と伊織が今日を生き延びる策を労し、行識は行識で平凡な日常を送る中、ある晩に行識は人識に声をかける。

「人識さん、このナイフを知りませんか？」「ナイフ？」

行識が取り出したのは一本のナイフ。

人識はそのナイフを見て、見開くように確認した。《無銘》ではない。彼が持つもう一つのナイフ、それはかつて人識自身が所持していたナイフ、錠開け専用鉄具アンチロックドフレードだつたからだ。

「そいつ……錠開け専用鉄具アンチロックドフレードじゃねえかよ！…」

「え、知ってるんですか！？」

「知ってるも何も元々は俺のもんだつたんだぜ？ まあ、あの赤いのに取られちまつたんだけどよ」「な、なるほど……」

人識はまじまじと錠開け専用鉄具アンチロックドフレードを見る。そして口を開いた。

「お前、俺が鍛えてやるよ」

「へ？」

「だから鍛えてやるつてんだ。錠開け専用鉄具だけじゃなく、《無銘》まで持つてんだ。傑作にもほどがあるぜ、お前。気に入った

お前なら、俺の技術を盗む資格がある、人識はそう語った。

行識が頼もうとしていた事が偶然の形であれ、一致したのだ。こ

れはこれでおいしいというのが本心だろう。

「ただ、俺は弟子なんてもんを持つた事がねえ。だから、修行は厳しいし、最悪死ぬかもしねえ。構わないな？ 引き返すなら今が一番だぜ」

「引き返すなんてしませんよ、こたえ師匠」

行識の言葉はその一言で十分だった。

人識は傑作だな、と呟く。

こうして、零崎人識と零崎行識の関係図は出来上がっていく。そして物語は動き 一年の歳月が流れた。

(零崎人識との関係 師弟関係)

第五回 零崎行識（後書き）

とこつわけで今回から少し本編（？）からフローラティウム。ト。いわゆる過去編です。

まあ、本編でも述べた通り、過去の世界について過去の話とこつのもまたシユールですね。w

一応今回は行識が零崎として覚醒した時の簡単な話となっていました。

伊織ちゃんの出番がとても少なかつたですが伊織ちゃんの出番も増やせるよう頑張ります。

一応既存キャラ陣がちやんと書けたかなあと後書きで強烈なメタ発言をしてまた次回ーと。

第陸日目 零崎行識の人間関係（前書き）

全体に一気にばら撒こうと思つたら集中しました。
まあ、問題はナッシング

零崎行識が哀川潤に出くわし、零崎人識に引き会わされ、無桐伊織に遭遇し、零崎行識を名乗るようになつてから 一年の月日が流れた。

そして彼は今 家出している。

家出、というのは実際のところ大嘘で、現実には彼の師匠、零崎人識から日本中を回つて来いという指示を受けているからだ。

零崎人識はその昔、放浪癖が凄まじく、日本中を回つていたという。さまざまな知識や経験はそこから来ているのだろう、と行識は思うし、現実にそうなのかもしれない。実際の解答は本人にしか分からないので、詳しい事は言えないだろうが。

第一、なんでまた無銭の状態で無理やり旅に行けなどと言つたのか 不思議でかなわなかつた。

しかし、その中でさりげなく、殺人衝動を抑えるコツも身についていたのも事実。時折暴走しかけるのでそこは人類最強に頼んで無理やり沈静化してもらうが。

最も、普通に考えればそれは有り得ないようで、行識は哀川潤のお気に入りなのだろう、と人識に言っていた。それなら、最初の遭遇で見逃してもらえた理由も納得がいく。

「最近はなああんにもないなあ」

眩きながら、行識はある歓楽街を歩いていた。気づいてみれば、某道楽市に來ていたのであるから行識も自分自身であきれ返っていた。

行識が探すのは寝床だった。食事に関してはある程度我慢が利くし、いざという時の食費もあるので平氣だ。それ以上に寝床がほしかつた、というのが大きい。

気づいてみれば、何かに導かれるかのように 行識はあるビル群のある一棟の地下にいた。

「……ピアノバー・クラシックラシック?」

そこには一軒の店がある。

店の前には『Piano Bar Crash Classic』と書かれてあり そして、その掛けには閉店中を示す『CLOSED』と書いてあつた。

しかし、行識にとつてそんなものは関係ない。人識の弟子となり、二年近くナイフの扱いに関する厳しい指導を潜り抜けた行識にとつて、普通のドアは無意味だ。どこも電子扉だというのに、不思議と、ここのお店はごく一般的な錠の扉である。

行識は錠開け専用鉄具を取り出し、難なくピアノバー・クラシックラシックの中へと入る。一応扉の鍵は内側から閉めておいた。照明の電源を入れると自然と照明はつく。しかし、その店内はひどく散らかっていた。ある程度きれいにはしてあるけれど、ところどころが錆びている。どうやら、かなり昔の店らしい。

ならどうして照明が入るのだろうか 不思議には思つた。そして、静かに置いてあるグランドピアノ。行識は自然とグランドピアノとの距離を縮めていく。

そして、そのグランドピアノの譜面台に置かれてあつた譜面を覗

き見た。

「……作曲№ 61『遭遇』……かなり変わってるなあ」

そんな事を呟きつつも、行識は自然と椅子の上に座り、譜面通りにピアノを弾き始める。

この曲の作曲家はかなりの腕を持っているのだろう 行識にはそう感じた。行識は表の世界でピアノを習っていたおかげで多少はできるが、かなり難しい。色々な曲を弾き、そして勉強したがそれら全てがこの一曲に凝縮されている。

失敗したらそこを弾けるようになるまで必死に練習する。休むつもりだったのに、行識は気づいてみると時間を忘れ、ピアノを弾く事に熱中していた。

そして、曲通り 行識は遭遇する事となる。このピアノバーのオーナーの友にして 入り口の鍵を持つ唯一の男と。

行識は一切気づいていない。しかし、その男はドアを開けると絶句していた。その位置にはかつての友が座つて演奏をしていた席だ。しかし、そこに座つているのはその友ではない。だが、その友を彷彿とさせてしまうようだった。

自然と賞賛の拍手を送つてしまつ。

「…………あ」

「素晴らしいですよ、少年くん。まるで曲識くんの演奏を聞いているようでした。不法侵入はいただけませんが、まあ不問としましょ

う」

「あなたは？ オーナーですか？」

「いえいえ。わたしはただの常連客ですよ。オーナーはさつき述べた曲識くん。…………しかし、十八年前にお亡くなりになられまして」「十八年前に？」

「ええ」

男の言葉に行識はどこか思い辺りがある。どこかで聞いた事のあ
るような不快感が襲う。

その思考が少しずつ咳くよりに漏れ出す。

「曲識曲識曲識……え？ あ、あの零崎一賊三天王の！？」

「三天王を知っている……。少年くん、君は一体何者なんですか？」

至極普通にして真っ当な男の問い合わせに行識は答える。

「零崎行識といいます」

「《零崎》……なるほど。生き残っていたのですか……あの惨劇があつてなおも生き残りがいたとは……」

「惨劇？」

「少年くんは、存知ありませんか。十八年前に橙色の暴力の手により、零崎一賊は全滅させられたのです。後々分かつたのですが、それを成したのは人類最強と呼ばれる哀川潤と互角と呼ばれる人物だった……と」

「橙色の暴力、ですか」

「さて、では本題に移りましょ。しかしその前にいつまでも少年くんと呼ぶのは相応しくなさそうですね、君にとつて。私の独断ではあります、が、行識くんと呼んで構いませんか？」

「構いません。ところで、聞いてませんでしたがあなたは一体……」

「罪口商会第四地区総括、及び罪口商会長 罪口積雪です。まあ、結構私も年老いていますからね、当然といえば当然でしょう」「何が当然なんですか？」

「気にしたら負けですよ行識くん」

はあ、と行識は積雪の言葉に渋々納得する。実際は納得の『な』の文字も無いだろうが。

積雪は近くにあつた椅子に腰を掛け、

「ところで行識くん。私の職業は「存知ですかね?」

「はい、武器職人……でしたか」

行識の回答にその通り、と積雪は首を頷かせ、

「特別に行識くんが望むのであれば無償で武器を提供しますよ。勿論、現存の武器の改良でも受け付けましょう。様々なオプションの設置なども含め、無償でいたします」

「なんでもまた」

「惹かれたのですよ。曲識くん亡き後、この店に入るのは私だけ……事実上、管理を委託されたも同然でした。友の店を潰すわけにもいきませんからそこはのらりくらりと色々な手を使いました。しかし、今日。行識くん、君の音楽を聴きました。当然、曲識くんほどではありませんが私は不思議と君の奏でた音楽に惹かれたのです。熱心に取り組もうとする姿勢に惹かれたのかもしれません」

だからこそ　と積雪は言葉を紡ぐ。

その瞳は自然と熱を帯びる。行識が積雪の言葉に呑まれ始めていた。

「私は行識くんを支えていきたい。貴重な逸材ですからね。深い理由は特に無いです、今の説明が精一杯でして……武器の件、今回は無償で致しますよ」

行識は積雪の誘惑に乗せられていた。

しかし、積雪が裏切ることはまずないと行識は踏んでいる。理由は単純だ。積雪の目は真剣そのもの。誰かを蹴落とそうとするような野心らしきものは一切見当たらない。

否、積雪には行識を攻撃するだけの理由が何一つとしてなかつた。
そして、行識は一つのナイフを取り出す。それは、アンチロックドブレ錠開け専用鉄具だ。

「これは？」

「錠開け専用鉄具」というものです。これを

本来の性能を生かし

たまま使える武器にできますか？」

積雪は錠開け専用鉄具を取り、まじまじと見て

「可能です。ただ、このまま下手な改造を加えると本来の性能を失いかねません。なので、このナイフの長所を生かした武器にします。錠剣に近い形になると思います」

「錠剣に近づけた形……ですか？」

「ええ」

積雪は首を縦に振った。

そして、二日後にまた来ますと言い残し、アンチロックドブレード錠開け専用鉄具を持ってピアノバーを後にした。

去り際、積雪はこうも言い残した。

できればまた行識くんの演奏が聞きたいです、と。

それから一日間、行識は何かしたか、と聞かれたら何もしなかったと答える。

食材はどれも賞味期限をとっくに過ぎていてまともに使えないから人類最強から借りた軍資金で食費は賄っていた。寝床はこのピアノバーで取ればいい。

その中で、零崎一賊三天王の事を行識は考えていた。現在の一賊で唯一、三天王全員から面識のある人識から一応の事は聞いていた。

マインドレンデル

自殺志願、零崎双識。

シムレスバイアス
愚神礼賛、零崎軋識。

そして
少女趣味、零崎曲識。
ボルトキブ

偶然ではあるが、三天王に密接のあるこの場所に来れた事は何かと奇跡ではないかと行識は思っていたし、同時に三天王の事をもつと知りたくもなった。

行識の中に芽生える好奇心。知る事は悪くない。そう、悪くないはずなのだ。知識は無いよりもあつた方がいいだろうし、同時に一賊の事をもつと知る事ができる。

現時点では実戦経験はまったく無いに近い。だから人を殺したこともない。最も、哀川潤により事実上の不殺を彼は言い渡されているようなものなのだが。

そして彼は、罪口積雪は約束通り一日の時を経て、再びピアノバーを訪れる。行識はいくつかの譜面台を睨んでいた。積雪が行識くん、と声を掛けてやつと存在に気づく。

「あ、どうも積雪さん」

「ひどく熱心なのですね」

「まあ。一応探つてみたら結構な数の譜面が見つかったので。どちらで弾こうかなと。……厳密には弾けるか、ですけど」

「なるほど。まあそこは焦る事無くゆっくり選べばいいと思します。で、頼まれていた品ですが完成いたしました」

そう述べる積雪の右手にはトランクが一つ。その中に改造を加えた錠開け専用鉄具が入っているのは間違いない。

そして、積雪はトランクを最寄りのテーブルの上に置き、中を見せる。その中には入っていたのは

「銃？」

「ええ、当初は銃剣と言つてましたがそのままの銃剣では意味が無いと判断し、収納型の銃剣とさせてもらいました。必要なときだけ

「さりげなく死亡フラグ立てないで下さい。僕もうここへ戻れない
もしさまた武器を必要とするならここへ来て下さい。もしくはこの
連絡先へ。必要な代価は、行識くんの演奏をまた聴きたいといふく
らいでしょ」

「さりげなく死亡フラグ立てないで下さい。僕もうここへ戻れない
もしさまた武器を必要とするならここへ来て下さい。もしくはこの
連絡先へ。必要な代価は、行識くんの演奏をまた聴きたいといふく
らいでしょ」

行識は錠開け専用鉄具が出せるようにしてありますし、当然この銃から錠
ばつちりだ。積雪は行識の手のひらなどを聞いていないのに、それ
らを視覚だけで判断したということになる。

その技術に感嘆とする行識の表情は積雪にも察知できたらしく、

「かれこれ私も武器を長く作り続けていますので、ある程度なら見
ただけで判断できます」

「いや、見ただけでここまで精度の高いものは早々作れないでしょ
う……」

「ところで その銃の名前なのですが、錠開け専用鉄具銃とい
う……」

「名前にしたいと思つています」

「錠開け専用鉄具銃……いい響きですね。気に入りました」

「ならよかったです。一応その銃のまま錠開け専用鉄具を取り出す
には引き金の上にあるボタンを押して下さい。そうすれば錠開け専
用鉄具は姿を現すでしょう」

「感謝します、積雪さん」

「触り心地などもよい。

これは大きい戦力になるだろつ。

行識はその後、罪口積雪に何度もお礼を言つて、積雪はこう述べ
て立ち去つた。

「もしさまた武器を必要とするならここへ来て下さい。もしくはこの
連絡先へ。必要な代価は、行識くんの演奏をまた聴きたいといふく
らいでしょ」

よつなフラグじゅありませんか」

「ははは、冗談ですよ。では、失礼いたします」

積雪は連絡先の示す紙をテーブルの上に置き、トランクを持つてピアノバーから姿を消した。

直後、中へ入ってきたのは あの赤色の人物、人類最強である。

「よお、こーたん」

「……なんでまた『こーたん』なんですか。別作品の作者さんから訴えられますよ?」

「いやだつてさあ、そこは仕方ないだろ? 之前がこいで始まつてゐんだから」

「すつげえメタ発言じゅないですか、そーー。こつやのこと別の呼び名にしてください! ! !」

「なら……こーくんとか? ……あーダメだ、やつぱーこーたんじゅねえと」

「……で、何の用なんですか?」

行識はため息と呆れ顔を浮かべつつ、哀川潤に聞いた。
何も考えずに哀川潤がここを訪れるわけが無いのだ。

「何の用? いや別に何も」

「まさかの無用! ?」

「いや、ただの暇つぶし」

「暇つぶし! ?」

「いや、実際は用あり」

「やつぱつあるじゅないですか! ! !」

「ところで、今の『罪口』だろ? じつじつ関係だ?」

「……僕は付き合つて浅いんですよ。曲識さんのお店じつです、」

「こー」

「へえー、ここ曲識の店だったのか。あいつあたしに黙つていつの間に……」

軽く怒つてゐるようになつたがそこは見なかつたといつては話を進めるにする。

一方の哀川潤の拳はどうみても怒つてゐるようになつてしか見えないくらい強く握り締めているのが目視で確認できる。

「で、潤さん。今日は何の用ですか？」

「ん？ ああ、行識。最近あれの調子はどうなのさ？」

「……あれですか？」

「ああ、あれだよ」

行識は人識にも、伊織にも、そして旅の道中で出会つたあたらしい『家賊』にも言つていなことがある。

それは 行識が時間に関与できる特別な力を持つてゐる、ということ。

傍から聞けばそれは超能力にも感じる。いや、実際には超能力といつレベルを遥かに越えていた。

そもそも、この能力の兆候が見られたのは二年前、人識と伊織に邂逅してまもなくだつた。突如として脳裏に映つた映像ものがその僅か数分後に現実となる現象が起つたのだ。

それが幾度も続き、不思議に思つた行識は哀川潤と連絡を取り、密かにこの事を打ち明けた。

哀川潤も当初は信じられなかつたが、時間の経過と共にそれが嘘偽り無い事実だと判明すると不服ながらも納得してくれた。因みに戦闘でもこの力は役に立つてゐる。哀川潤に使つてもそれ以上の速度で攻撃されるので哀川潤クラスになると無意味に近いが。

「最近は特に兆候も起きてませんね」

「なるほど。ま、あの力は下手に流出していいもんじゃねえからな
「ですよね」

そうは言つても実際のところ、不殺は貫いても、殺し名などとの面識はある。だから行識の名も知られ始めていた。理由は簡単で考えるまでも無い。

全滅していた零崎一賊が再興したのであればその名は一気に知れる。そして、その第一号が行識だった それだけだ。

「ところで行識。次はどこに行く氣だい？ 場所によつては途中まで連れてつてやつてもいいぜ？」

「お気持ちだけもらつておきます。実を言つと考へてません」

「いつつもそれだよなあ、お前。……まあいいか

諦めが早すぎませんか、と行識。

だつて、お前が決めてないんじゃどうしようもないじゃん、と哀

川潤。

何だかんだでナイスコンビである。

「あ、そうだ人識さんに連絡でもしようかな……」

逐一連絡を入れる、これだけは師匠である人識に言つ渡されたいた事実なので行識は携帯をズボンのポケットから取り出し、電話帳から人識へかけた。

「もしもし?」

『行識どうしたんだよ』

『いえ、特に。相変わらずの定期連絡です』

『ふーん。で、今どこだよ』

『ピアノバーのクラシッククラシックです』

『はあ！？　曲識のにーちゃんの店ん中いんのか、お前！？』

電話越しからでも人識の動搖は明らかに伺えた。

か 今まで置いた事の無いほど
でかい声である

「師匠、知つてゐるんですか?」

ああ、一時期行つてた事があつてな、今から十八年位前になるな

卷之二

「匠、三十代なんですよ？」

お前のその発言の方かよ、因とアタ発言だ!!!

『ちよ、何散らかしてんだお前ら！』

これはこれまで面白いですね!!

卷之三

電話越しで何やら探めていたようだった。

そういうえばほんの一月前、行識は一人の女性と出会ったことを思
い出す。

彼女は二つ名乗った。

「私の名前？」

「花織さん。あなたは《零崎》だと思います」

『雲嶺』何謂てかの事

「家賊？」

「はい。《零崎》は血筋などではなく、流血のみで繋がる家賊。あ

なたにはその家賊になる資格がある」

なら、なる。

あつさりと花織は承諾 いや、快諾した。

そして、花織の希望で彼女は人識と伊織の元へ向かい、その後居候と化したらしい。

その後の人識からの話によれば、伊織と花織の仲が良いらしく、師弟関係にあちらも発展したとか。何かと急すぎて傑作だ、と人識は言っていた。

そう、木野花織 彼女こそ、零崎高織なのだ。あくまで一年前の。

役者は揃つ。

舞台も整つた。

そして、遂に物語は動き出す。

一気に加速する。

代替可能はいらぬ。

あるいは時間収斂だけ。

そう 時はこれより一年の経過と共に何の前触れ無く訪れる事となる。

歯車の回転は既に 止まらなくなつた。

第陸四目 零崎行識の人間関係（後書き）

ところで、今日は罪口積雪さんに登場してもらいました。

実を言ひつと、クラシックの書き方をとことん見直してお
りまして、色々と苦労した話です。

蛇足で言つておくと、行識のピアノが弾ける設定はこれのためだけ
に用意しました。

ご都合主義すいませんへへ；

次回は今話の終わり方通りな展開になると思います。

第2回　翻訳王アキラ（複数形）

はじめましておめでたす。
今話は読む際にお気をつけ下さること。

「伊織さん」「どうしました？」

いつも通りの反応で伊織は返す。
声を掛けたのは居候同然で生活をしていた零崎高織　杏、木野花織だ。

「伊織さんは『零崎』になつてからだいぶ経つりますよね」「そうですねえ」
「伊織さん、死ぬつて事についてですか？　難しいことを聞きますね」「でも、これは長い間『零崎』にいた伊織さんだからこそ、聞けると思うんです」
「人識君もいますよ？」「いや、正直聞きづらいです」
「あ、なるほどー」

合点があった。

伊織の反応に、でしょ？と苦笑いで返す高織。

そして、伊織は少し複雑な表情を浮かべた。少し回答に悩んでいるようだった。

考へがまとまつたのだろうか、やがてその答えを紡ぎ出す。
それが何だったのか　実際のところ、高織は覚えていない。
個人的に忘れていたか、理解できずにそのまま忘却したか
あるいは、その事柄を無かつたことにしたのか。
その真実は高織自身にも分からぬだらう。間違いなく。

私は零崎高織。ただの殺人鬼だ。以前は木野花織きのかおりと名乗っていた。殺人鬼になる前はフラワーショップを営む両親と暮らしていた。しかし、そんな両親も既にいない。私が殺してしまったからだ。

そう、魔が差す とでもいうべきか。

ある日、突然唐突に私の手に握られていた一本のナイフ。そして私の服にべつとりと強く焼きつくように塗られた真っ赤な血。

私は自首をしてしまおうかと思っていたところへやつて来たのが行識だつた。私の方が彼より一つ歳が上なので呼び捨てにしている。というより、私は元より年下をさんとか君とか言わず、常に呼び捨てで呼んでいる。

行識は私を家賊にしてくれると言つた。そして私は私以外で唯一女性の零崎に会つた。

それが私の師である無桐伊織さんとの出会いだつた。ついでに人識さんも。

私は数少ない女性の零崎。そして、伊織さんもまた女性の零崎。当然、女性間だけに話は盛り上がつた。人識さんをよそに。

「ですよね伊織さん！」

「そうですよねえ」

「なあ、俺はそこまではぶられる必要があるのか？」

「そりやありますよ人識くん」

伊織さんは笑みを浮かべ、人識さんは複雑な表情を浮かべている。

居心地が悪いのだろう。

私はそう判断した。……といつよりは明らかに田つきなどが不機嫌に見えるからだ。

「で、その理由は？」

「女の子同士の話に男子が首を突っ込んだらダメですよ」

「いつ俺が首を突っ込んだ！？」

「いや、大分突っ込んでますよね人識さん。この前も料理を作つてたら邪魔してきたし」

「あれはあのままだと火事起こすからだろうが！　火事なんて起こしたらまた家探ししなきやならねえだろ！！」

「なるほど、うつかり失念してました」

「あんたもう少し賢かつたんじやないのか……？」

人識さんは呆れたように伊織さんを見て呟いた。

人識さんは私から見れば父親のようなものだ。出来の悪い娘を少しでも真っ当に育てようと苦労する　そんなイメージを私は持つている。

世話を焼く辺りが直に影響しているとか口に出したら間違いなくNGだろ？　それは私自身も自覚している。

「でも高織さん。わたし達は家賊なんですよ」

伊織さんはいつも何があつても、そんな言葉を欠かす事はない。

家賊であり、家族。

家族であり、家賊。

それこそが零崎一賊なのだ。

私は少なくともそう感じている。

伊織は高織に自分の知る事全てを口外し、そして戦い方を教えた。とはいっても、実戦経験がそこまで多くない伊織が教えられる事など、非常に少ない。しかし、高織は決して愚痴を零さなかつた。とりあえず言えたのは、伊織は高織に木や花に関する武器を所持させたという事だ。

彼女自身、そういうものを瞬時に判別できる地味に変わつた才能を保持していた。花屋の子供は皆こうなのだろうか、と伊織は思つたが勿論、そんなはずがない。そこは高織が変わつてているだけだ。そして 高織もまた、自立する形で伊織と人識の元から離れた。

「なあ伊織ちゃん」

「んー、何ですか人識くん？」

「気づいてるか？」

「はい、薄々は」

「長年《零崎》だった事はあるな。つー事だ、出てこいよ」

人識の言葉に誘発され 白仮面の男、空時元雨^{そらじごんう}が人識と伊織の住宅内へ足を踏み込む。

「ふむ、流石に数話もブランクがあると厳しいものがあるな

「登場早々にメタ発言！？」

「分かりますねえ。わたし、こんな口調だつたか正直言つて疑問ですからねえ

「伊織ちゃんまで乗るな！ 何か恥ずかしいからマジで勘弁してくれ

れ！！

さて と空時元雨は口にし、懷から拳銃を取り出す。どこで
もありそうな黒い自動拳銃を人識に向ける。

「《零崎》に銃弾は効かねえぜ？」

「ああ。効かないだろうな。しかし、俺の銃弾は君を確実に殺すだ
ろう」

「年老いたわたし達は取るに足らない という事ですか？」

「そうだ」

「（）で歴史の礎となれ。零崎人識、無桐伊織」

非情な銃弾が放たれた 。

僕が人識さんと伊織さんの死を知ったのは、死後すぐの事だった。
死後すぐ、と言つても、三日後のことだ。

僕はすぐに動き出す事となつた。いや、当然だつた。

死亡現場を第一発見者から聞けば、抵抗の痕跡はあつたらしい。
つまり、抵抗空しく人識さんと伊織さんは殺された、という事にな
る。使われたのは拳銃である、という話も聞いた。

僕の師匠を殺し、さらには零崎に攻撃を仕掛けた。皆殺しは確

定。

しかし、僕としてはこの敵を皆殺しで終わらせてたまは無い。殺しの理由を僕は問いたい。

勿論、殺すつもりでいる。潤さんとの約束は既に破綻した。潤さんにこの後、殺されようが 文句は無い。。。破つたのはこちらなのだから。

そしてすぐに僕はその犯人 空時元雨と対峙する運びとなる。

「よお

いや、あれを対峙するというべきなのだろうか。

空時元雨が勝手に、僕の目の前に現れた。

「あなたは？」

「俺か？ 空時元雨といつ。とりあえず 零崎人識と無桐伊織を殺したのはこの」

「死んでください」

そこまで言えば十分だった。

一気に距離を詰めた僕の右手に握られる刀子《無銘》^{むめい}。

その刃先が空時元雨へと伸びた。咄嗟に空時元雨もその速度に驚きつつ、その一撃を避ける。

そしてすぐに間隔を置く。大体10メートルくらいだろうか。

「ふうー危ない危ない

「それで逃げ切つたつもりですか？」

「何？」

すぐに僕は錠開け専用鐵具銃ともう一丁、自動拳銃を取り出し撃ち出した。

アンチロックドフレードガン

「この自動拳銃は当然の如く、積雪さんに作つてもらつた代物だ。特別なものはいらないので普通の拳銃がほしいといつ僕の要望を積雪さんは承諾し、すぐさま調達してきてくれた。

武器職人である積雪さんに悪いことをしたな、といつ実感はあるにはあつたがどうあえず、ある程度は積雪さんが調節をし、使いやすさは抜群だ。

「くつ、油断も隙もあつやしねえ」

「そりゃ そりでしょ あなたはやつてはいけない事をしたんだ。正直僕の沸点は限界を超えてますよ」

「おいおい自分で自分の沸点なんぞ決めてるんじゃねえ」「決まりますよ」

だつて と僕は少し間を置く。

この男に僕が今、何を考えているかなびきつと分からぬだらう。

「今僕はあなたを殺したくてうずうずしてゐるですからね…」「くだらないな」

瞬間、冷たい感覚が全身を駆け巡る。体から力の抜けていく感覚。僕の足元に落ち行く赤き液体。血である事はすぐに分かつた。

ふと腹部に目をやれば、ナイフが僕自身の体を貫いている。

「！」で朽ちるといい。零崎行識

「つ……あ……」

体の力が抜けていき、やがて僕の体が倒れる。血が止まることがない。

まことに、このままだと……。空時元雨がゆづくつと近づいてく

る。

動かなきやならないのに……動けないなんて……

「零崎一賊にはここで滅んでもらおう。当然、お前もここで死んでおひづ」

今の僕に何かを発するだけの気力は残っていない。精々、空時元雨を鋭く睨みつける事しかできなかつた。

それしか出来ないという事実が内心悔しかつたし、憎かつたし、腸が煮えくり返るようだつた。

僕は僕自身の非力を恨むことしかできないのだろうか……こんな終わり方は正直勘弁してほしいもんだよ。

このまま死んでしまうのだろう そう思つたし、感じ取つた。

「あたしの大事な大事な行識に何してくれてんだ？」

その声は半ば突然。そして唐突。不意にやつて來た。

ふと目をやつた僕の視界に映る赤色。そう、全身一色が赤色と言つてもおかしくはなかつたし 第一赤色といつ色を、あそこまで目に余るよつて注目を集める色を見間違えるという事はまずないと僕は思う。だつて目立つもん。

そして、全身一色といえば 僕の知る限りでは一人しかいない。

「よお」

「哀川潤……人類最強か」

空時元雨は少し眉を顰めた。

潤さんの表情はかなり怒つていて見えて分かる。

助けに来てくれたのだろうか？ いや、そんなわけがない。

しかし、潤さんは今“大事な行識”と口にした。厳密には大事な

は一つ多いが、そんな事はどうでもいい。

だから僕はその答えを無性に聞きたくなつた。残る力を振り絞つて、声をかけた。

「潤……さん……」

「黙つてな。ここはあたしに任せておけつて」

いつもは冗談を言ひ合つたりする仲だというのに安心感が僕の中に浸つていつた。

そして、自然と瞳が閉じられていく。僕の意識はそこで途絶えた。

次に目覚めた時、行識の体には包帯があった。

動かそうとする度に激痛が走りそうだつた。

行識を診てくれた人物はかなり変わつていて白衣の下に水着という前代未聞の服装だつた。勿論、行識はドン引きして脱走を試みたが、現在の体の状態からして動かせず、渋々居座つている。

「人識くんの事、残念だったね……」

そのドクターは行識の事情に多少精通しているのだろうか、怪我

の具合と共にそんな言葉をかけてきた。勿論、同情といった事があるのだろう。

しかし、言い方などからして人識の知り合いである事はすぐに理解できた。しかし、人識はこの人物の事を言つた事は無い。古い知り合いなのだろう。

行識は問う。

「あなたは一体何者なんですか？ 潤さんの知りあいのは分かりますけど、人識さんとはどういう……」

「絵本園樹。えもとそのき潤さんと人識くんとは狐さんとの事で出会ったの」

「狐さん？」

「うん。まあ、とりあえずそこ辺りはあまり詮索しないで。狐さん風に言つなら終わつた事なの」

「変わつてますね、その狐さん」

「まあね。人識くんが二十年近くも長生きしてたとは思わなかつたけど……それ以上に全滅していた零崎一賊が再興されているつていうのも驚きだよね」

「そうですか」

「いつくんは知つてゐるのかな、この事……」

「いつくん？」

「人識くんとは仲のいい子でね。鏡のような感じだ、って言つてたんだ以前」

「鏡……人識さんみたいな感じですか？」

「まあ、そうなるね」

会つてみたいな、と頭の中でそんな事を一瞬想像した行識である。しかし、今はこの傷を直す事が最優先だつた。

哀川潤はあれから空時元~~雨~~を追つてゐるのだといつ。しかし、人類最強に逃げ続ける事が出来るなど常識を逸脱している。人間業で無いように行識は見えた。

「つづーわけだ、すまん!」

傷が治り、行識が活動を再開できるといつ日には哀川潤は姿を見せた。

彼女が口にした事は空時元雨を逃がした、という事だった。

「逃げられたんですか……」

寧ろ行識は感嘆としていた。

「まあ、行識。お前の頼み通り、零崎一賊の面々は一箇所に避難させておいたぜ。食糧なんざも全部〇〇K」「すいません。何から何まで」「構わねえよ。で、約束は守つてくれるんだよな?」「はい、出世払いになりますが必ずお支払いします」「ま、全然構わないぜ。でも一つだけ誤算が起つてな」「誤算?」

ほれ、と哀川潤が壁を軽く叩くと開かれるドア。そのドアを開けた張本人は高織であった。

「高織!?」「行識さん……いえ、行識。私も連れて行つてほしいの」「何で」「私も師匠を殺された。私だつて……敵をとりたい。お願ひ「駄目だ。いくらなんでも危険すぎるよ」

高織は行きたいとして決して諦める事無く言葉を紡ぎ続ける。そして、行識は頑固として首を縦に振らない。

そこへ哀川潤が助け舟を出すよつこ、

「高織ちゃんを同行させてくれたらあたしの依頼料、チャラにして
もいいぜ?」

「はい!?」

「ほら、女性に優しく、だろ?」

哀川潤の言葉にはあとため息をつきつつ、行識は首を縦に振った。

「まあ、僕だけでも厳しいからね。高織、頼むよ

「勿論

周知が一致団結した その直後。

「そうか。ではそろそろ始めるとしてよつ。零崎行識、零崎高織」「...?」「...?」「...?」

突然響く声。いや、判別は可能だ。
空時元兩の声である。

全員がすぐさま周囲を見渡し

「時空を超えた戦いの始まりだ」

その声と共に行識と高織の姿がその場から消失する。現場に残されたのは哀川潤と絵本園樹の二人だけだった。

行識と高織が放り出された空間は一言で言つてしまえば、氣味の悪い空間であった。

辺りは白い光だけ。残る全ては黒一色。空も大地もその全てが真っ黒だった。

「どこよこ?」

「さあね、ここがどこか分かれば楽なもんだよ」

『全く仕方ないの。行識よ』

その言葉として突如現れたのは青き袴を身に着けた老人 幽靈の零である。

しかし、高織はそれを見た瞬間、目が点になつたように動搖した。

「え、何……? 錯覚? 幻覚?」

『おつと。お前さんは初めてじやな。ワシは零といつ』

「はあ……」

『まあ細かい事は後回しじや。しかし、幽靈のワシを見た瞬間に動搖するとは。意外とビビリなんじやな』

「誰がビビリですつて……」

明らかに高織の表情が怒りに満ちていた。

行識ですら本氣で一步退きたくなるほど、この時の高織は恐ろし

かつた、と記載しておこづ。

しかし、零は余裕を保ち、飄々としている。

『行識。ワシが少し働くとしよう』

「そう。じゃあ頼むよ零」

あいわかった、と零。

辺りを見渡す。行識は確かに実力だけなら着々と身に付けて伸びているが殺氣というものに関してはどうしようもない。

それを補うのが零だ。彼には幽靈だけあり、特有の能力というべきものが備わっている。

それが殺氣を読み取る力。

先述した闇口靈衣との戦闘で彼が彼女の居場所を探知できたのは彼女の持つ殺氣を零が感知したからである。

そして、意識を集中していたのだろう 閉じていた目を開いた。

『そこじゅ』

零が一つの光の球体を指差した。

「あそこに何があるのよ？」

『よくは分からん。原理こそ不明じゃが、あの光の球体の先に空時元雨とやらはある。そして なぜかは分からんのはこの先じゅ。ワシの現実を逸脱しておる』

「現実を逸脱？ どういう事？」

『殺氣と呼べるものはある。しかし、『零崎』特有の殺氣が殆ど無い。得体の知れん何かが、なぜか感じ取れる。正直、幽靈体のワシですら寒気がするわい』

「幽靈が寒気つてそんな非現実的なこと言わないでよ零」

「いや既に非現実的だと思うだけど私」

そこで零は最も大事な事を口にする。いくつもの殺氣を読み取る零だからこそ感知したこの場の真実を。

『行識、高織。』ヒは時空の狭間とこゝべき空間のようじや』

「『時空の狭間？』」

『つむ。あやつこよひてワシらはざつや時空の狭間のよひな空間に投げ出されたのじや。そしてあやつりはワシの指した先の球体いや、時代じやな。そこにある』

「時空の狭間つて事は連中は時を越えてるつて事！？」

「……時を越える力か……」

『行識。お前さんの気持ちも分かるがまづはあやつらを何とかせねばならん。何かをしでかす前にの』

「そうだね。零、詳しいことは分かる？」

『ふむ。零崎特有の殺氣は二つ。大方じやが、人識と伊織のじやう』

『了解。じゃあ高織は伊織さんに、僕が人識さんを探すよ』

『あまり無茶はしないでよ』

「それは僕の台詞」

そして、行識と高織は歩き出す。

球体に触れると彼らの体は時空の狭間から姿を消した。

零崎行識と零崎高織。一人の再会は以前である、といひに記す。

(零崎行識VS空時元雨 勝者、空時元雨)

第2回 動き出す時（後書き）

ところで、ここで今回の話で未来の人識と伊織ちゃんには「退場願い」ました。

色々と「都合主義じゃね？」といつ箇所もあるかもしれません。特に零の辺り。

そして、次回からは物語を元の時間軸に戻していきます。

それではお楽しみに。

哀川潤。

あの人を一言で言うなら『人類最強』につきるだろうけれど、一方で、あの人もまた人間なんだな。と僕は思つ。以前、人識さんから聞いた事がある。人識さんと潤さんが初めて遭遇した時、潤さんは十三種類目の人類だと名乗つたらしい。まあ、頷けなくも無い話だと思う。

そして、その潤さんが今、僕と人識さんの目の前にいる。口元を鋭く歪ませて。顔も強張つて。完全に怒つてているのは、誰が見ても明白だと僕は感じた。

「ひ・と・し・きクウ～ン？　どうこう事かなあ……？」

潤さんが、人識さんに少しづつ近づいてくる。

人識さんは僕をちらりと見る。まあ、発端は僕なんだし、お前が何とかしろよと言つてているのだろう。ていうか、それ以外に考えられない。

人識さんは確かに巻き込まれた身。それでオダブツというのはそれこそ救われない……ていうかそれ以上に僕が恨まれそうで怖い。呪い殺されそうな気もしないわけではない。

「あ、あのこれには一応ちやーんとした理由が……」
「いや理由とか聞く必要ないし。約束破つたから半殺し確定」
「半殺し！？　まだ生かすつもりかよ！？」
「だつて、その方が色々と都合良さそうだから」
「都合良さそうつてアンタどんだけうつ氣混じつてんだよー」
「いや、ここは傑作だぜつて言つべきじやね？」
「そうそう確かに傑作だ……なわけあるかーツ……」

見ていて正直なことを言つと……面白い。

人識さんと潤さんのやり取りがここまで面白いとは思わなかつた
といつのも事実。

つい、その笑いが漏れる。

その漏れた声によつやく潤さんも僕に目線を向けて反応した。

「で、その少年は誰だよ？ 人識クン？」

「何でもかんでも俺に振るなよ！」

「だつて、色々と面倒だし。それにあたしが分かるわけないだろ？」

潤さんの言葉は暴力的に見えるけど、しかし考えてみればその通りで、正鵠を射ている。少なくとも、この時代の潤さんと僕は初対面なのだから僕のことを知らなくてもそれは仕方ない。

そもそも僕はイレギュラーな存在なのだ。この時代の人間ではない。

「えーとだな……てか自分で名乗れよ」

「振るんですか、そこ！？」

「自分の事は自分でしろ！…」

「……ちつ」

「露骨に舌打ちするんじやねえ！」

人識さんの言葉をあいておき、僕は潤さんを見て言つ。

「哀川潤さん、お相手願います」

「は？」

不意打ち といつ言葉を使えばそれでおしまいだ。

しかし、僕は少なくとも見てみたかった。この時代の哀川潤の実

力を！

「僕の名は零崎行識……今より遠い未来から来た《零崎》の一人です！！」

その言葉と同時に僕は懐の錠開け専用鉄具銃アンチロックドブレードガンを取り出し、発砲する。勿論、そんなものが潤さんに効くわけがないと、いう事くらい、僕は把握している。

あくまで今のは挑発用だ。

しかし、潤さんは突然の攻撃であつたに関わらず、銃撃をあつさりと避ける。まあそなるのは読めていたから、何の問題も無い。

「ほお、あたしに喧嘩売るつてか？　いい度胸じやん。いいよ、少しだけ相手してやるうじやんか」

「その余裕、どこまで通じますかね！？」

僕はその言葉と共に潤さんとの距離を詰め、《無銘》むめいで潤さんの首筋を狙う。喉を一閃してしまえば、それはもう即死に等しい。流石の人類最強でも、元を返せばただの人間。基本中の基本だけは忘れてはいけない。

「甘いんだよ」

潤さんは僕の攻撃を読んでいたかのように、《無銘》の一閃をあつさりと避ける。そして、カウンターと言わんばかりに拳を構え、僕へ一撃を仕掛けようとする。

しかし、そうは簡単にいかない。僕だって、伊達に殺人鬼をしているわけではないし、相手は何せ潤さんだ。時間操作能力を存分に生かさなければ、第一、勝負にもならない。

僕は迷わず、時間ときを止めた。そして、距離を置く。止めている間

に一閃すればそれでおしまいなのは分かっている。けれど、ここで潤さんを僕は殺せない。

いや、正しく言ひなら 殺してはいけないんだ。ここで潤さんが死んでしまえば、後の時間軸に多大な影響が及び、僕がまずここに立っている事すら危うくなるから。

そうなれば、零崎一賊はまた、全滅状態へ逆戻りだ。

だから、僕は腹をくへった。あの武器を使う。僕の持つ、最強の武器。

そう、殺し名や呪い名が轟く、暴力の世界風に言ひながら 僕の

得物を使う。

僕は零に語りかけた。

「零

『行識。いくのか?』

「うん。潤さん相手に力なんて出し惜しむ事はまず不可能だからね。こうなつたら、僕も全力で行く。この得物を潤さん相手に使つた事は無いからどうにもいえないけど……」

『大丈夫じゃ、問題あるまいて』

零はいつものように僕にそう言つてリラックスさせてくれる。

そして、僕は軽く深呼吸した。正直言つてしまつと、僕の体力は一度の時間停止の影響でかなり限界に近づいている。

この能力の面倒なところは体力の消費が桁違いに著しい、という事だ。まあ、これで何のデメリットも無ければ、万々歳なんだけど……そつまくいくわけがない、という事もまた僕は理解している。

「時間再開」

僕の言葉と共に、時間はまた始まりを告げ、風が流れ出す。葉が

とぎ

落ちる。

そして、潤さんの拳は空振りした。当たり前だよね、僕はそこにいないのだから。

「なつー?」

当然、潤さんは驚いた。しかし、僕はそんな潤さんを見ながら、高々に宣言する。

なんでだろうかな、不思議と不意打ちみたいな事をするのがこの場合に限つてだけは嫌いなんだよね。人間、よく分からぬことだらけだ。

そして、僕の傍らにはいつも通り、零がいる。

「潤さん。あなたには出し惜しみをする必要がなさそうだ

「何?」

「だから これを使わせてもらつー。」

瞬間、零の姿が変わつていく。人というものを越え、その形を見るみるえていった。そして僕の手に握られる一本の太刀 日本刀。

そう、零の真実。それすなわち、彼はただの幽霊などではなく、僕自身の武器。

罪口商合、罪口積雪さんが作り上げた一品だ。そして、同時に意志を持つ唯一無二の武器。

「……幽霊が武器に変わつた?」

「ええ、これが零の真の姿です」

驚きを隠しきれないのは潤さんだけではない。それは人識さんもまた同じだった。

「な、なんだそりゃ……反則すぎるだろ、オイ……」

「反則も何も。僕は零崎の一員です。僕はずつと色々な武器を扱いましたが、得物だとは言つてません。僕の得物はこの零ですよ」

まあ、あくまで本当に少し前に変更したんだけどね。

僕が零と出会ったのは絵元園樹さんのところで治療を受けていたときだ。積雪さんは僕の元を尋ねると、こう言つた。いつも通り、淡々としたような口調で。

顔色も何一つ変えず。

「今日は色々と大変だと思います」

「まあ、そうですね」

「やはりまた行かれるのですか?」

「はい」

僕のその言葉を聞き、積雪さんは一つのトランクを開いた。そのトランクはとても長細い黒色で、トランクの中に入っていたのはそう、零だ。日本刀の状態で彼はそこにいた。

だけど、僕はそれを知らない。この時はあくまで、まだただの武器として認知していたのだから。

「これは?」

「零。私の作り上げた最新作の武器です。ある程度行識君にフィットするように作っておきました。これを差し上げます」

「そんな、ただでなんて……」

「これは私の一つの賭けでもあります

「……はい?」

「たまたま、偶然にもたどり着いた、一つの考えを元に作り上げたこの武器は今までに無い新しい一面を持つてます。使い勝手をこの

戦闘を利用して……とはこきませんが、聞かせてほしいのです

「……分かりました」

要するにただで武器をあげるから、少しだけ実験台になつてくれ、
といふ事だった。

なかなかひどい事をするもんだ、と始めは思つたんだけど、零と
意志を交わし続けるにつれ、いつこう武器も新鮮で悪くないなと思
つたわけだ。

最も、零は僕の得物でこそあるが、実戦経験は何一つとしてない。
はつきり言つてしまえば、ただの賭けだ。

「へえ、結構面白いじゃないの」

潤さんはいつも通りの笑顔を振りまく。当然、口元が強く歪んで
いるから、傍から見れば恐ろしい表情としか思えない。

「こきます

僕は零を持ち、そして構える。リハビリを兼ねた運動で何度も零
を振るつた事はあるけど、実戦で使うのは今日が最初。

だから、うまくいくか……僕にも分からない。

一気に潤さんとの距離を詰め、その手に握られた剣を振るう。潤
さんは難なくその攻撃を避けるけど、僕は攻撃を止める事無く、何
度も振るい続ける。

その攻撃を避け続ける潤さんは言つた。しかも少し呆れたような
表情で。

「いくらなんでもそりや素人の振り方だぜ？ ムラありますがだつ
一の

「それは失礼しましたッ！」

まあ、僕でも大振りなのはなんとなく分かる。自覚できるって事はそれほど大きい隙もまた、生まれている。

しかし、潤さんとて攻撃する隙はあると思うのに一撃を決めてこないのは、正直不思議だつた。

僕はとにかく、必死に攻撃を続ける。そうやって僕はもがくしかない。

現に僕は未来の潤さんに勝てた事が一度もない。

そして、潤さんは退屈そうになのか、はたまた、この一切動こうともしない展開に苛立つたのか、突然僕の振るう零の太刀を指一本で受け止める。真剣白刃取りなんてレベルではないのはすぐに分かる。

「行識つて、いつたか？」

そう言つ潤さんの口調は怒氣を僅かではあったが、感じる事ができた。間違いない、怒つてゐる。

僕は息を呑み、

「……ええ」

と答える。

潤さんは僕を見つめて言つた。

「力の差つていうのを理解したらどうだ？」

「理解しているつもりですよ？ これでも」

「それにしちゃ勝つ気が無かつたみてえじゃねえか」

団星だつたから僕は何も言い返せない。

二十年後の 未来の哀川潤なれど知らず、この時代の哀川潤は僕が何者なのかを理解していない。

」のまま、殺されてしまうのかなと僕はふと思つた。そして潤さんは僕の沈黙を肯定と受け取り、いつ口にする。

「ちつとは反省してる」

次の瞬間、僕の意識は消えた。

「なあ、ふと思つ事がある」

空時元雨はふと、呟いた。その言葉に反応し、元雨の元へ、一人の人物が近づき、

「どうしたの？」

「いや、最近……俺はふと思つんだ」

「何を？」

「俺は何かにかき回されて、こんなやうな気がするんだ。『氣のせい』か？」

そんな元雨の弱気に等しい発言を聞き、クスクスと小さな笑い声を立てると、その人物は言つ。

「珍しいわね。アンタがそんな弱気な発言をするなんて」

そんな言葉を発した者はガラスコップに水を注ぎ、そのコップを

元雨に手渡す。元雨もそれを拒むことなく、受け取った。

「で、だ。お前はまだうなづか？ 花濃？」

花濃と呼ばれた者はまじりか寂しげな表情を浮かべ、元雨にこいつ返す。

「そんなの、怖こに決まっているだしそ。生死と隣り合わせなんだか

う

「……そうだな」

元雨はその言葉にまじか納得したよつた様子で呟いた。

(零崎行識×哀川潤 勝者、哀川潤)

第捌回 零崎行識VS哀川潤（後書き）

さて、今回の話では行識と潤さんに戦闘していただきました。
そして、新キャラ・・・とはいいませんが、これまで数話にわたつて登場してきた空時元雨の仲間の一人が花濃という名前である事の発覚。

哀川潤編、と位置づけているこの章ですが、本格的なやり取りは次回以降に持ち越しですねw
それでは次回もお楽しみに。

「やつと出合えたな」

「『やつと出会えたな』。ふん。俺はお前を知らんが」「知らなくて結構」

「『知らなくて結構』。ふん。では聞かせてもりおつか、お前の名を」

「空時元雨だ……ああ、そちらは名乗る必要は無い。知つているからな、『人類最悪』」

「俺はそこまで有名になつたか？ それ以上に 一の面を被つていながらにして俺を俺だと認識するためには最低限一回は遭つている必要があるだろう」

「細かい理屈は抜きにしてくれ。説明がややこしい」

「ふん。そんなことはどうやらでも同じこと……ひとつ事か」「やついう事だよ」

僕が田を覚ますと、視界にコンクリート状の壁が映る。

……ていうか生きてるんだ、僕。……いや、これは夢なのかな？

「よお、未来の零崎クン」

そんな言葉を聞こえた。少なくとも、こんな感じで言つ人はあるしかいないだろう。そう、人類最強である 哀川潤くらいでないと。

僕が視線を声の方向 窓へ向けると、パイプ椅子に座る潤さんがそこにいた。それだけじゃない。

「……やつほー、行識」

「やつと起きたのかよ」

「高織に……人識さん？」

目を疑つた。いや、人識さんなら納得はいく。驚いたのは高織の登場だ。

それに もう一人、ニット帽を身に着けた女人人がいる。とう事は……

「零崎舞織さん……ですか？」

「そうですよお。本名は知つてますよね？」

「はい、無桐伊織さんですよね」

それくらいは覚えている。師匠の相方とも言つべき人だつたんだから。

しかし、気づいてみればここには零崎一賊が四人。そして人類最強。

……はつきり言つて最強パーティーじゃないか。

「行識クン。事情は色々聞かせてもらつた。まさか未来から零崎一賊を滅ぼそうとする輩が出てくるなんざ、あたしの想定外だよ」

「普通なら想定できませんつて」

僕は苦笑しながら言つた。そういうえば零はどこへ行つたのだろうか。破壊されていないといいんだけど。

それを察したのか、潤さんが

「お前の武器ならあたしがちょっと預かつてゐる。かなり変わつてゐる武器だつたよなあ。おかげで色々と聞けたけど

「あなたは何を零から聞きましたか！？」

「正直マジで不安だ……。

零、ああみえて結構僕のことになると口軽かつたりするし、変な勘違いをもらしていないといいんだけど。

「いやー、幽靈にも貞操の心配する奴いたんだなーって驚いた

「あなたは本当に何をしかけたんだ！？」

ちょっと後で零から事情聴取しよう。うん、確定。ていうか少な
くともそれをしないと怖すぎまる。

「まあとにかく、これで全員集合できたわけ

と、高織が言つた。確かにそうだ。

これで最初の目的は達せたわけで、空時元雨がどれほどの勢力を
持つてゐるかは知らないけれど それでも、かなりこちらに分が
ある事は間違いないと思う。

何せ、こちらには人類最強の請負人 哀川潤がいるのだから。
そんなわけで少しだけ浮かれていたその空氣に 入り込む扉の
ノック音。

僕は回診なのかと思いつつ、はーいと適当に答えた。しかし、中
へ入ってきたのは全く別の人。

「よお、元氣そりでなにより

「「空時元雨！？」」

そう、なんと空時元雨が敵陣へ一人、飛び込んできたのだ。
しかも、余糸を軽めにして。

どういうア見か分かつてているのだろうか。正直、気が知れないと
いうよりは 理解不能だつた。

しかし、咄嗟に僕と高織は構える。空時元雨はそれを見て含み笑
いをする。

「何がおかしい？」

潤さんが空時元雨へ問つ。ビ」となく、苛立つていのよつた感じ
だ。

何が原因なのかは全く分からぬ。

「おかしい？ いやいや、そんな事は無いよ。『人類最強』」

「なら、なんでわざわざこんなとこへ来たんだ？」

「今頃なら零崎^{じこ}行識^{けいしき}が目を覚ましているだろつな、と推測したまで
さ。哀川潤と戦闘^{バトル}することくらいなら読めるからな

「なるほどね」

「納得していただけたようで光榮だ」

「それで全部説明したつもりか？」

そう告げたのは人識さんだ。伊織さんも人識さんもかなり警戒し
ている。

そもそも、一賊を滅ぼすと言つていて、それを知つていての
に警戒しないわけにはいかない。

ましてや、その張本人が目の前にいるといつのこと。

「零崎人識に無桐伊織……か。まあいいや。今日は何もここで戦争をしようなどという事を言いに来たわけではない」

「なら何の用なんですか？　あなたのような人が何も考えずに来るとは到底考えられませんよ？」

と、伊織さん。確かにそれは正鶴を射ている。

そして、空時元雨も理解しているようで仮面の下からククク、と笑い声が漏れた。

「ああ、そうだな。では单刀直入に言おう。俺は挑戦状をお前達五人に突きつけさせてもらう」

「ちよ、五人って最強まで入れるつもりかあんた！？」

「そうだが？」

「……マジで笑えねえよ。傑作なんてもんじゃねえ」

人識さんがブツブツ独り言を口に出す。正直、潤さんとチームを組むのがそこまで嫌なのだろうか？

……まあ、あの潤さんだからなあと僕は納得もしてしまつ。だってあの潤さんだもん。

「三日後、澄百合学園跡地で待つ。なあに、どうせまだ取り壊していない終わつた場所だ。　使える限りは使わせてもらつとするよ」

そんな言葉と共に空時元雨は僕らに向けて背を向けた。

そして、空時元雨は一人呟くように言つ。

「ククク……ようやくあいつの実力を見る事ができるよ……」

それはどこか　まるで空時元雨はこの決戦を待ち侘びているかのようなそんな口ぶりをしていた。

「お帰り。どうだった？」

空時元雨の帰還と同時にいつも通り、水の入ったコップを渡す花濃。

空時元雨はその水を一気に飲み干すと、コップを花濃に返す。

「どうだったかと言われたところで殺氣を向けられまくったに決まつていいるだろ?」

「そうね。あんたから殺氣の痕が感じられるもん」

「全く。血の多い連中だよ」

「血の気が多い……ね。そういうば、肝心のあつちは?」

「ん? 『人類最悪』か? どうだろ? な……あつちもあつちで分からん。どいつもこいつも理解不能だ」

そんな事を言つ空時元雨はどこか困ったような表情を浮かべる。心底、うなざりしているかのよつでもあった。

そんな時。

「おこ、宣戦布告はしておきたのか？」

「空時元雨でもなく、花濃でもなく、ましてや闇口靈衣でもない声の持ち主。

その言葉を聞き、空時元雨は黙つたグーサインを出した。成功の証である。

「そつが、やつとなんだな」

「ああ、やつとだよ」

「とこつ事は動くのね、元雨」

「そつこつ事だ」

行くぞ その言葉と一緒に彼らは隠れ處を放棄する。アジテ

且指す先は何処なのか。

しかし、分かる事がただ一つある。

歯車は一気に回転を早めていく ただ、それだけだ。

(対戦なし 勝者、なし)

第九日目 挑戦状（後書き）

という事で軽め軽めではあります、西東天さんにも「」登場していました。

個人的に戯言シリーズで大好きなキャラの一人です。

早く天さんを本格的に登場させたいですwww

第拾四回 ただの幕間じゃないよフラグといつんだ（前書き）

祝！ 偽物語アニメ化！！

ニコファーレでそれ知つた瞬間、テンションが異常にアゲアゲになりました！

・・・その30分後、転寝してましたがね^ ^；

第拾四回 ただの幕間じゃないよフラグというんだ

「十全ですわ、^{デイアフレンド}お友達」
と、口にしたのは潤さんが呼びつけた僕の戦闘力面強化を目的とした人物。

言つなれば 師匠、と言つべきだ。

石丸小唄。

七本槍や大泥棒などと呼ばれ、同時に潤さんのライバルだという。噂だけは聞いた事があったのだけど、いつもして面を会わせるのは初めてだ。

「それで？ いつこの子供をお返しすればよいのですか？」

「移動時間を踏まえると今日一日だけだ。明日の昼までには返して来てくれ。それまでは何させても構わないから」

と、小唄さんに返すのは潤さんだ。

ていうか、何させても構わないって……何かするに当たって僕の意見などは全て無視ですか。

小唄さんも潤さんの言葉に首を縦に振ると、

「十全ですわ。では早速借りるとしてます。あ、早々

「んだよ？」

「生きて帰れる保証ありませんわよ。死体でお返ししても？」

「ん？ 死体でも返してくれるんだ」

「縁起でもないこと止めてくださいよー」

気付けば。

大声で僕は一人にそう言つていた。

「……まあそれは冗談として。実際に生きて帰れるかは貴方次第ですわよ、^{デイアフレンド}お友達」

「僕次第……ですか？」

「ええ。いつして無駄口を叩いては時間の無駄ですわね。早速向か

うとしまじゅう「ひ」

「じゃ、よろしく頼むわ」

「十全ですわ、お友達」

*

そして、場所は変わつて小唄さんのくりコピター。と、言うのもなんだけど、空時元勲との遭遇後、潤さんは一気に電話をかけ始めた。

何人ではなく、何十人単位で。

そして、一時間後にはさつきのシーンになつていた、というわけである。

突拍子過ぎてワケが分からなかつた。

「ところで、お名前をまだ聞いてませんでしたわね」

「そうですね、小唄さん」

「既に私の名前を知つている辺りは未来から来た、という哀川潤の情報は正しいようですね」

「まあ、細かい説明は置いておくとして、僕は零崎行識といいます」

「細かい説明はこの移動中にしてもらいますわ」

と、小唄さん。

どこか不機嫌そうだが、何か癪に触る事でも僕は言つただろうか?「助手をくれてやる、と言つておきながら実際には一日限定、おまけに強化しろなどとは理不尽にも程がありますわ」確かに強化しろなどとは理不尽にも程がありますわ」確かにそうだ。

ていうか潤さん、どんな説明で小唄さんを納得させたんだ……。

「そういえばなんですか?」

「どうしました、お友達?」

「今、どこへ向かつてているんですか?」

「大厄島ですか?」

「大厄島?」

「大厄島ですか?」

聞いた事もない地名だ。

……大厄島？

あれ、ちょっと待つて。確かに以前、人識さんと伊織さんが闇口の拠点に行つた事があるって言つていたような……。

すつげえ、嫌な予感がしてきた。

「……小唄さん。もしかしてですけど大厄島つて」

「闇口の拠点の一つですわ、お友達」

「やつぱりかああああああああ！！！」

あの時の僕次第つて意味がよく分かる！

ていうか殺されちゃうでしょ、これ確実に！

よりにもよつて闇口に自分から殴りこみに行くようなものじゃないか！

「補足ですけれど、とりあえず入つて即殺されるといつ事態にはなりませんわ」

え？

小唄さんが面倒くさそうに続ける。

「あそこの長と直接交渉に哀川潤が成功したのです。特訓に付き合つてくれるそうですね」

「潤さんすげー……」

「厳密には、人類最強と生涯無敗の直接対決を申し込むついでにしたそうですけど」

「ついでって……」

ついででそんなことしてほしくない。

ていうか人類最強と生涯無は……え？ 生涯無敗つて今言わなかつた？

「小唄さん、さつき生涯無敗つて口にしませんでした？」

「しましたわ。生涯無敗の『結晶皇帝』^{クリスタルカイザー}、六何我樹丸^{りっかがじゅまる}、大厄島で貴方を待つ一人ですわよ、お友達」^{ティアフレンド}

……六何我樹丸。聞いた事だけはある。

大厄島騒動の時にいた一人で、爺さんと人識さんは口にしていた。

闇口の人間に稽古をつけてもらえる辺り、この我樹丸という人物の強さが伺える。

実力は分からぬいけど、それでも。

大厄島を舞台に、地獄の特訓が始まるという現実だけは避けようが無かつた。

「ところで、高織はどうするって言つてました？」

「高織？ 例の連れですか？」

「そうですけど」

「何でも、自分が稽古をつけると哀川潤が口にしてましたわ」

「……高織。生きて再会できるかなあ」

ふと、そんな不安が通り過ぎていった。
だって、相手があの潤さんだもん。

第拾四回 ただの幕間じゃないよフラグといつんだ（後書き）

タイトルで遊びました。

特に意味は無いです。すいません。

偽物語も楽しみですが、傷も楽しみ。そして鬼物語も楽しみ。
楽しみしか増えません。

新年最初の更新です。
本年もよろしくお願いします。

大厄島。

闇口衆の拠点の一つとされ、生涯無敗の『結晶皇帝』クリスタルカイザー、六何我樹リツカガジュー丸がいる場所だ。

最も、僕は彼の人生がどのようなもので、そしてどのように閉じたかに一切の興味は無い。しかし 実際に見てみて分かった。彼は僕なんかよりも圧倒的に強い。それだけは瞬間的に、絶対的に理解できた。

「余が我樹丸じゃ」

闇口衆の拠点に小唄さんのヘリが着陸し、大厄島の大地に降り立つた僕を待っていたように目の前に立つ白髪交じりの男。その人物が六何我樹丸だということはすぐに理解できる。

僕は六何我樹丸を見据える。空時元雨という存在との対峙のおかげで静かな強さ そんな人物の実力は体験済みなので言つまでも無い。

この人物は 間違ひなく強い。間違ひなく僕なんかよりも絶対に。

「お主が哀川潤の言つておつた未来の見える零崎か。実に面白い。零崎一賊というのは常に飽き飽きせんから面白いの」

そう口にすると、六何我樹丸は高々と笑う。僕はその姿が恐ろしく感じられた。

理由は分からぬ。

「まあよい、人類最強が持ちかけたゲームにしては中々好条件じやからなの。こうして快諾したまでよ」

「げ、ゲーム？」

僕は疑問に感じて思わず口に出してしまつ。

「知らぬのか？ お主と憑依が戦い、憑依が勝てば哀川潤に無桐伊織、更にはお主の相棒の者に子を孕ませてもよいと提案されたのじ

やが

「無断で人の人生壊すようなゲームするなああ！」

いくらなんでもそれはちょっとやりすぎですよ、哀川さん！

僕は思わず小唄さんに田を向ける。しかし、小唄さんは首を横に振つて明らかに諦めてくれと言わんばかりの素振りを披露する。

小唄さんにも無理な事態のようです。

僕はため息を軽く吐き、再び六何我樹丸を見据える。

そして、僕は宣誓した。

「いいですよ、六何我樹丸。貴方のその望み 僕が破壊してみせます」

「かかかっ。威勢が良いの、お主。さうでなくてはならんな

では、ついてくると良い

その言葉と共に六何我樹丸は僕に背を向けて歩き出す。僕は静かにその後を追つた。

道中、姿を消していた零が姿を現す。

『中々深刻な事態じやの、行識』

「そうだね。でも、負けるわけにはいかない

こんなところで敗れていてはいざれ来るであろう空時元雨との対決で勝利を收める事は難しい。

これは、まちがいなく僕自身を強くするための修練なのだ。そう、鍛錬といえば鍛錬なのだろうし、修行なのだろうと思つ。

『しかし、あの我樹丸とかいう男は本当に未恐ろしいヤツじやの。あそこまでの静かな強さは稀に見れんぞ』

「うん。それは間違いないよ。もしかすると 空時元雨よりも強

いかも。あまり正確な判断はできないけど」

『充分に有利得るじゃろうて。しかしそう考へると空時元雨という男は相當なやり手と見えるな。何せ『闇口』を使役しておるのだから

ら

「うん。それに多分 アイツの配下というか、部下みたいなヤツ

アイツ

はまだいる

『これは思いの外、かなり厳しいかもしれんの』

「厳しくても殺すだけだよ、零。家賊に仇なす者は皆殺し。忘れてないよね?』

『忘れておるわけなかろう。ワシがお前さんにして使役される事を許しておる要因はその心意氣の良さゆえ』

『それは貴方の憑き物ですか、^{ディアフレンド}お友達』

と、ここで小唄さんが一言入れてきた。確かに幽靈なんて珍しいかもしれない。さらにそれと対話する機会なんてなおの事珍しいだろう。

そして、対する零は大笑いし、

『かかっ! 憑き物とはまた大胆な表現方法じゃの』

『憑き物以外にどう言えと』

『確かに傍から見ればそうじやう。しかしワシは行識の得物そのものじや。普段は靈体化しておるがな』

『靈体化……。まるでサーヴァントですわね』

『そうじやの』

「え、ちょっとなんでここで別作品のネタを引っ張つてくるんですか!?」

しかも、明らかに今までのパターンからすれば接点全然ないしその作品。

『しかし、^{ディアフレンド}お友達』

「は、はい」

そこで小唄さんはこんな疑問を飛ばしてくる。

『貴方の言う敵……空時限雨という男の事ですが、話だけ聞く限り零崎一賊を滅ぼして、一体彼に何の損得があるというのです? 零崎は流血によつて繋がる殺し名でもかなり特異な家族なのに』

小唄さんの言葉に僕は一瞬息を呑んだ。確かに考えてみれば不自然だった。

僕らの対処が早かつたからかもしれないが、未来で殺された一賊

は人識さんと伊織さんだけ。そしてそこから数日の間を考えれば、一賊の犠牲者は増えていても仕方ない。空時元雨の目的を考えれば尚更だ。

まるで

「僕らを誘つていた……？」

そうなると、かなり話は変わつてくるし、一段と目的も不透明になつてくる。

仮に空時元雨の真の目的が僕や高織にあつたとしたら、僕らを誘う事で一体どんなメリットが空時元雨にあるのか。

そんな事を考えていた矢先、六何我樹丸が言葉を発した。

「何を話しておる。どれ 待たせたな憑依」と、気付けば森林地帯に足を入れていたようだ。考え方や話に夢中で一切気付いていなかつた僕も僕なのだけど。

「いえ そこまで大した時間は経つておりません。問題は一切ありませんよ」

そこまで言つたところで『ばんつー』といつ音を立てて、鉄扇を開く和服姿の女性。

「で、彼がそうなのですか？」

「そうじや。未来の零崎に間違いはなかう。初対面で分かつたわあれはかなりの腕の持ち主じやぞ」

あの、丸聞こえです。

「そうですか。では」

と、そこで女性が歩く。僕との距離は正面僅か一メートル足らず。

「私の名は闇口憑依 未来の零崎、名をなんと言いますか？」

「零崎行識」

「なるほど 何かの機縁ですね、これもまた。私たちは零崎と切つては切れぬ妙な縁を感じざるえませんよ」

「はあ」

憑依さんの言葉の意味を僕は知らない。

そして、憑依さんが距離を開く。

「では始めるとしましょう
余計な言葉は無用です
分かりました。では

僕はそこで合図をかける。身体全体に戦闘開始を告げる一言を口にした。

「闇口憑依。貴方の未来を 破壊する」

(零崎行識 VS 闇口憑依 戦闘開始)

第拾壹日目 大厄島上陸（後書き）

次回は行識 V.S 憑依です W

前話通り、今回は行識と憑依さんの対決です。

「若い」

「 閻口憑依がそんな言葉を口にする。言い慣れている辺り、口癖なのだろう。」

「 貴方は実に若い、行識さん。ただ一つの制約をつけられるだけでこうも普通の殺人鬼。否、こうもあつさり、弱小プレイヤーに成り下がるとは。貴方は未熟以外の何者でもない」

「 僕はそれに異論を唱えれない。」

「 まあ、貴方はそれだけそれに頼りきつっていたという事。貴方自身が意識していても。はたまた無意識でも」

「 僕はそれに答える事ができない。否、正しく現状を説明するならば

「 僕は地に伏させていた。」

「 制約。」それが僕の今回の修行で唯一制限された事だ。

「 武器ではない。僕にかけられた制限、それは 僕自身の能力で ある時の干渉の禁止。ここを発つ前に予め潤さんに催眠術をかけてもらつて、時の干渉を無意識下でも発動できないようにした。」

「 勿論、解術できなければいけないらしく、小唄さんはその解術の術を知つていてる。」

「 そして始まつた僕と閻口憑依の戦闘。」

「　若い・いつも直線上にだけ突っ込んで来るなど愚策にも程があります」

瞬間、闇口憑依は姿を消す。そして僕の身体は近くの大木に走っていた。

たまたま手にしていた《無銘》をギリギリのタイミングで杉の木に刺し、即座に引き抜く。そして、殺氣を探す。

「貴方は素人なのですか？ 貴方は、貴方自身の持つ能力とやらが使えないと満足に戦えないような生半可なプレイヤーではないでしょ？」

「そんな事　ありません」

軽く深呼吸。そして、《無銘》を引っ込める。

最初のこのやり取りでなんとなく分かった。やはり　全力でいくしかない。否、元々これは零を使ってこそその修練だと僕は思う。勿論、僕自身のレベルを上げていく事も絶対条件なのだけれど。

「零、いくよ」

『了承した』

零が瞬く間に日本刀に変化していく。勿論、普段の零とは違い実物だ。

「ほお、意味深な幽霊ですね。いや、刀といつべきでしょ？」「闇口憑依がどこからかそんな声を出す。感嘆としているのはどうとなく察せた。

「ですが　それも使い手次第。貴方の本来の得物の実力　見せてもらいましょうか」

軽く刀を一振りして僕は静かに意識を集中する。刀の状態の零では普段の会話などはできない。

全て自分で為さなければならぬのだ。

「見つけた！」

後方五十メートルの杉の木を一閃。しかし、姿は無い。でも、僅かに見える足跡。間違いない闇口憑依はここにいた。

瞬間

「やはり若い」

「ツ！？」

突如背後から響いた闇口憑依の声。直後、僕は正面から杉の木に叩きつけられていた。背中を思い切り何かで叩かれたのは明白。

闇口憑依の武器にそんなものがあるかと聞かれれば、唯一一つ存在する。鉄扇だ。鉄扇で思い切り叩けば、背中に強打を与える事は十二分に可能だと思う。しかし、そこから僕が杉の木に直撃したまでの理由は一切分からない。

「……ツ……ハア……ハア……ツ」

気付けば自然と息が切れていた。

呼吸も荒い。目眩もする。

「やはり、貴方は素人のプレイヤーも同然。私の今の攻撃が何故ある今までの威力を誇つたかは説明する気にもなりません」

どうせ、もう倒れるのですから。

闇口憑依のそんな言葉と共に僕の膝が自然と崩れ落ちる。

「若い」

闇口憑依は言った。

「貴方は実に若い、行識さん。ただ一つの制約をつけられるだけでこうも普通の殺人鬼……否、こうもあつさり、弱小プレイヤーに成り下がるとは。貴方は未熟以外の何者でもない」

闇口憑依は紡ぐ。

「まあ、貴方はそれだけそれに頼りきつっていたという事。貴方自身が意識していても、はたまた無意識でも」

そして闇口憑依はこう、口にした。

「貴方に私は打破できない」

気付けば、零も落としていた。息も荒くなつていくばかり。このままでは誰が見ても闇口憑依の勝ちは明白だ。

「……終わつて……ない……」

「終わったも同然です。貴方の呼吸を徹底的に乱しました。安静にすれば数時間で治るでしょうが、今の貴方には戦うだけの力は残さ

れていな……」

刹那、僕は自身の身体に、残る力を振り絞つて《無銘》を突き立てた。

瞬間、赤い液体が地を流れる。それが血である事は言うまでもない。

「な……！」

闇口憑依は啞然としていた。自分で自分の身体にナイフを突き立てるヤツなんて、確かに異常としか思えない。

でも、これで少し楽になれた。《無銘》による痛みに全ての意識が集中する。つまり、流れを乱したといつても、それはあくまで優先順位。

「これで まだ戦える」

「貴方……正氣ですか……」

闇口憑依の言葉に零を拾いながら、僕は毅然と応える。

「正氣ですよ。これで勝機は戻った」

「思い上がるのもいい加減にしてもらいましょうか この程度で私に勝つたつもりで？」

確かにそうだ。闇口憑依を打破する手段は正直、ない。そして流れ出る血を考えれば もつと僅かに五分がいいところだろう。

「ここからは 零崎の時間だ。闇口」

零の切つ先を静かに向け、僕は口にする。笑みが零れていいるのをどことなく僕は察した。

瞬間、僕は零を一振りする。

「素振りですか？」

「いいえ 」

これでいいんです、と僕は口にする。

刹那、闇口憑依の近くにあつた杉の木が一本、一刀両断された。

「な つー？」

「これが僕の得物 零の力ですよ。名づけるなら 破零^{はぜろ}と言つたところです」

まあ、馳酒落ですけど と付け加えておく。

「し、しかしこれで勝ちだというのは思い上がり ッ！？」

闇口憑依が動搖する。それは当然だ。僕はこの周囲にある全ての杉の木を容赦なく切り落としている。

闇口憑依の能力は何か分からぬ。でも、彼女の動きを僅かでも封じれるなら、それで僥倖だ。

「そんな事をしたところで私には勝てない 分かっているはずですよね」

「勝てないなんて決まつていませんよ」

「え？」

瞬間、僕は闇口憑依を押し倒していた。零の切つ先を闇口憑依に向ける。

「な、何が……」

「僕は殺しは苦手だし、戦うのも正直苦手です。元の時代でも避ける事は可能でも決定打を与えられなかつた。でも 僕は一賊の中である事に長けては特化していたんです。あ、勿論 僕の持つ能力ではなく、ですが」

何の事だ、といつ表情を浮かべる闇口憑依に構わず、僕は言葉に紡ぐ。

「殺人衝動の扱いには 人一倍特化していたんですよ、僕は」笑顔で僕はその事実を口にした。闇口憑依は勿論、啞然としている。

そして、六何我樹丸が肩を竦めて

「どうやらこの勝負 お主の勝ちじゃな」

その言葉を聞くと目の前が真つ暗になつていった。

(零崎行識VS闇口憑依 勝者、零崎行識)

第拾貳回 零崎行識▽S闇口憑依（後書き）

色々と疑問とか多いでしょうが、いくつかに関しては次話で解消していこうと思います。

第拾參日目 あつさりと切れる幕切れ

人類最強に人類最終という存在を私は新しい人種と仮定し、それを尚且つ人工的に作成できたならば、それは世紀の大発見だろう。しかし一方でそのあまりにアンバランスな能力は世界を滅ぼす鍵にもなりえる。

つまり、新しい人類 言うなれば新人類。これらにはそれぞれ、持ち支える人間が絶対的に必要なのだ。勿論、それが平凡な人間ならばそれでいいかも知れないが、仮にその力を悪用しようと自論む不届き者も現れないとは限らない。

私はそういう事を踏まえて、更にその新人類に改良を加え、思考回路から何もかもを人間の許容範囲内に抑えることが必要だと考える。能力値は今までどおり 否、それ以上でも構わないが、行動原理を人間の理解可能な範囲内で抑え込むことが今後重要視される課題だ。

その詳細に関しては別紙の通りにまとめておく。私が求めるのは最強でもなく、最終でもない。言うなれば そう、究極絶無、絶対的な史上最高峰の人間である。

目覚めた。身体中が痛む。

「やつと起きましたかお友達。^{ディアフレンド}あの出血量にしてはかなり早いお目覚めでしたわね」

と、小唄さんはどこか恥々しげに口にする。一方の僕は今まで自分の行つた行動を思い出す。

その中でこいつも身体中が痛む原因は どう見てもあの時以外にはないだろう。自分で自分を思い切り傷つけたあの時しか。

「まあ、六何我樹丸との賭けはこれで貴方の勝ち。色々な意味で助かりましたわね。……まあ、今日はそこで安静にしてなさい」

「全治どれくらいですか？」

「そうですわね。ここまで目覚めが早いとなれば まあ明日には

全快でしょう」

と、ここまで口にしたといひで小唄さんが立ち上がった。

「どこか行くんですか？」

「ええ。貴方が動けないなら仕方ありませんわ。私一人で向かいます」

向かう？ どこへ？

それをどことなく察したのか、小唄さんは言つた。

「今晚、貴方を助手に引き入れた状態で向かうところですわ。その傷では動けないでしょう、今日のところは安静にしてなさいな」

そう告げると小唄さんは屋敷の廊下へと出て行つた。どこか不安げな表情を浮かべていたのはきっと氣のせいだ。

それと入れ違いになるように憑依さんが部屋へ入つてくる。

「思いの外、目覚めが早かつたようですね。若いというのは実に羨ましい」

どこか嫉妬めいてるようにな聞こえたのは氣のせいだと信じたい。

「しかし、やはり解せないのです。最後のあの時 ビうじて一瞬で私を押し倒せたのです？」

「やっぱりそこから来ますか」

憑依さんは首を真つ直ぐ縦に振る。

ふう、と僕は軽く呼吸を整える。小さい深呼吸だ。

「そうですね……あれは零崎特有の殺人衝動です」

「殺人衝動……？」

「ええ。あの時も言いましたが、僕は殺人衝動の扱いに人一倍長けていました。人一倍人殺しを我慢できるとか 色々とありますが、一番はやっぱり……その殺人衝動を一瞬だけ全身の能力^{エネルギー}上昇に当たられるというところですね」

「な……！？」

憑依さんはそれに驚きを隠せなかつた。

いや、それは当然だろう。一瞬ではあるけど、相手をほぼ確実に殺せるかもしぬない一撃を放つ事ができるというのは僕の中での最大の必殺技だ。

最も、これを発動する前に大概の場合が限界に到達し、その度に潤さんにお願いして鎮めてもらつていたんだけど。付属するなら、この力は殺人衝動が限界点に達するか達しないかというギリギリにならないと出来ないので諸刃の剣もいいところ。使い勝手はそこまで宜しくない。

「なるほど……色々な意味で私は『零崎』を侮つていたようです。あの時のように」

「あの時？」

そこから先を憑依さんは口にしなかつたが、どこか思い当たる節はあるようだつた。となれば、それはそれであながち間違いではないだろう。

ところで、と憑依さんが話をそらす。

「大泥棒を追いかけなくて宜しいのですか？」

「ええ。怪我の治療に専念しろ、と言われたので」

「なるほど」

憑依さんはどこか納得した面持ちで口にする。そこからは、お互に差し障りない範囲での雑談に入つていく。六何我樹丸も途中か

ら入り、僕は未来の話も少しした。

勿論、彼らが二十年後の世界でどうなっているのかは分からぬ。でも、生きているなら こんな会話も未来で可能かもしかなかつた。

小唄さんが出て行つてから三時間後。小唄さんがある紙束を手に戻つてきた。

「やつと帰つてきおつたか。流石に大泥棒、と呼ばれるだけの事はあるわい」

「少し黙りなさい、六何我樹丸。私は今疲れています。それに気味悪いものも見てしましましたし」

「気味の悪い? どういう事です?」

小唄さんは答える代わりに手に持つていた紙束を僕に投げ渡した。どうやら、この紙束こそ今回の目的だつたらしい。

その中身を僕は見る気がしなかつた。

なぜなら、そこに記されていた題目は

翌日。僕と小唄さんは既にヘリコプターの中にいた。

「六何我樹丸か……」

去り際にどこか皮肉たつぱりに人類最強に宜しく頼む、と口にし

て尚且つ、

「未来とやらまた会えると良いな。未来の零崎よ」

何て口にするんだから正直どこか後味が宜しくなかつた。

ところで、もう一方の疑問　僕は『破零』と答へける事にした
わけだが、あの衝撃破染みたものがなんだったのかは分からぬ。
そこ辺りを零に聞いても全く分からぬらしい。

「ワシにも分からぬものは分からぬ」

とだけ口にしてしまった。後は何を聞いても同じ答え。まあ、作り手の罪雪さんなら分かるかもしれないけど。

小唄さん^{ディアフレンド}が言葉をかける。

「お友達、宜しいですか？」

「はい、どうしました？」

「時間がないよつでするので簡潔にまとめますと、私は当小説^{じゆ}を
でです」

ちょ、まさかのメタ発言！？

「まあこの先の結末なんて私にはどうでもいいですけど」
しかもちょっと黒い発言してゐし！

「少なくとも言えることは『時元爾^{ハシマツル}』といつ男の目的が何一つと
して分からぬ以上、今は慎重^{じゆ}に行くべきですわ。あの男の目的を
探れば、おのずと全ての答えは出揃うでしき」

「……はい」

さあ、決戦は　間もなくだ。

(対戦なし　勝者なし)

第拾參回 あいつと切れる幕切れ（後書き）

行識の発言で分からぬかもしないので補完。

行識の口にしていた一瞬起くる能力面のパワーアップの具体例は伊織ちゃんが憑依さんを撥ね飛ばしたあのシーンを思い出してくださいれば一番分かりやすいと思います。

行識はあれを自分の意思で発動することができるわけです。ただ、限界、ギリギリまで殺人衝動を溜めないと云はざりのデメリットがおきますし、連続で使うことは出来ないため、燃費はかなり悪いです。

以上、私流補完でした。ご意見などありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1874s/>

零崎行識の人間旅行

2012年1月5日21時53分発行